
続・サキュバスサッちゃん

片弓和美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・サキュバスサツちゃん

【Nコード】

N3508W

【作者名】

片弓和美

【あらすじ】

サキュバスサツちゃんの続編。光希とサツちゃんの娘、美希はいじめられっ子だった。絶体絶命のピンチに現れる黒い影。やがて覚醒した美希は目まぐるしく変化する世界に立ち向かうのだった。

第一章

とある中学校の二年生用女子トイレ。大沢美希おおさわみきは六人ほどの同級生達に取り囲まれていた。

「ママがお金の場所変えちゃって見つからなかったの、ごめんなさい」

リノリウムの冷たい床にペタンとアヒル座りして、小さくなっている美希。すでに何発か蹴られて、やっと起き上がったところだ。

リーダー格の沙也香さやかは腕組みしたまま、冷ややかに美希を見下ろしながら言う。

「それってさ、あんたの都合じゃん。あたしらが必要だって言ったら、あんたは黙って持ってくるしかなくね？」

「でも、あたしの貯金全部あげちゃったし、中学生だからバイトもできないし……」

足癖が悪く、一番暴力的な夏美なつみは美希の背中をグイグイと足蹴にし、土下座のような姿勢を強要した。

「だから、沙也香はおまえの都合なんか知らねえって言ってんじやん。また、あざだらけにされたいわけ？」

「で、でも、無いものは無い……っていうか……その……」

夏美は容赦なく体重をかけて、美希を押し潰す。

「やだ、やめて！」

美希の可愛い顔がトイレの床に押しつけられると、取り巻きの女子達もニヤニヤと笑みを浮かべる。そして、順々に美希の尻を蹴飛ばす。

小さな背中が震え、美希は細い泣き声を漏らした。

「へっ、泣いてやんの、だっせ」

夏美は黒髪ショートの後頭部に乘せた足で、さらにグリグリと押しつける。

「おい、鼻血出させんなよ？」

「へーい」

夏美の足が外されると、沙也香は美希の髪をつかんで前を向かせた。

「金が無いなら稼ごうか？」

「ど、どうやって？」

沙也香はため息をついて、首を振る。おもむろに美希のスカートをめくって、携帯を取り出した。そして写真を撮る。

「剥いてやれ」

夏美の号令で取り巻き達が美希の制服を剥ぎ取っていく。

「ああ、パンツはいいや。わいせつなんとかでこっちが捕まったら話にならないし」

と、いうことでパンツ一丁姿にされて、美希は寒そうに自分の体を抱きしめ、胸をかばう。

「ほら、ポーズとってニッコリ笑えよ」

——美希は散々罵声を浴びせられながら写真を撮られ、ようやく制服を返してもらった。

「その写真売ってお金作るの？」

「こんな貧乳画像で金取れるかっての。とりあえず、三日やるから二十万作れ。一日でも遅れたらこの画像をネットではらまくからな。これで少しはやる気出るだろ？」

「三日で二十万稼ぐなんて、大人でも無理だよ、きつと……」

夏美は美希の髪をつかんでゴスツと頭突きを入れる。

「頭使え、頭。大人じゃなくて、女子中学生だからこそ高く売れるものがあるだろうが。ヒント、客はロリコンのおっさん、商品はスカートの中身な」

美希はおでこを押さえ、目に涙を浮かべて考える。

「……パンツを売るの？ それとも売りをやれっていうこと？」

美希の顔から首まで真っ赤っかに染まっていた。

「あんたがやりたいようにやれば？ まあ、売りが一番手っ取り早いんじゃないの？」

『支払期日』が延長されたことで、とりあえず解放された美希は、公園のブランコに座ってボケーツとしていた。ピアノ教室の月謝を滞納した挙げ句に除籍になったから、火曜日と金曜日には夜までこうして時間を潰してから帰るのだ。

ピアノの先生から電話があった日、たまたま電話に出た美希は母親のふりをして、クビになった旨を聞いた。支払いが苦しいのなら滞納分は結構ですから、気の毒そうに言われてしまった。美人で優しくて、憧れのお姉さんだった先生に、だらしない親子という印象を持たれて切られたのだ。そんなことを思い出せばフーッとため息をつく。

「大沢さん、ここ、座ってもいいかな？」

美希はビクリと縮み上がった。いつの間にか同級生の男子がそばに立っていた。

「ど、どうぞ」

隣のブランコに座った亮輔りょうすけこそが、事の発端である。

「またいじめられたんだね。僕のせいで、ごめんね」

美希はいじめられていた亮輔をかばっていじめられるようになった。それまではクラスどころか学校じゅうで一番人気のお姫様だったのだ。成績優秀で運動神経も抜群、お日様みたいに笑う無邪気なクラス委員長はみんなの憧れだった。

「クラス委員長として見過ごせなかったただだから。それに、悪いのは亮輔君じゃなくて、沙也香ちゃん達だから。気にしないで」

地面に目を落としたまま、一息に吐き捨てるような言葉だった。

「……無理、してないかな？」

亮輔のほうを見ると、ちょっと困ったような顔で、それでも穏やかに微笑んでいた。

「……なにそれ。亮輔君のくせに、かっこつけてるの？」

「それは、『やだ、亮輔君のくせにかっこいい』っていう意味かな？」

美希はプツと吹き出して、ブランコをこぎ始めた。

「半端な気持ちで人助けなんて出来るものじゃなかったんだね。毎日毎日つらくて、たまに思うんだ。亮輔君なんか助けなければよかったって。あの時、たった一回の判断ミスで、あたしの人生百八十度変わっちゃったんだなうって」

つられてブランコをこいでいた亮輔は、神妙な顔で黙りこむ。

美希はブランコを止めてボソツとつぶやく。

「人助けなんて出来ないんだよ。だから、あたしを助けようなんて思わないで。なるべく恨まないようにするから」

美希は鞆を拾い上げると、さっさと歩き出した。

「あれ、美希ちゃんどうした？」

「光希君、おかえり。ちょっと話したいことがあって」

美希は駅で父親を待ち伏せしていたのだった。大沢家は名前で呼び合う友達親子である。

「じゃあ、まだ明るいし、甘いものでも食べて行くか？」

——近くの喫茶店に入り、ボックスシートで向かい合った。注文したケーキや紅茶が届くのを待って、美希は話を切り出した。

「あのね、えと、……赤ちゃんがね……できちゃったの」

光希は紅茶を噴き出しかけて目を白黒させた。

「冗談だろ？ 美希ちゃんはまだ中学生じゃないか」

美希は視線をそらして、もしもししながら続ける。

「中学生だけど……できちゃったんだもん」

「できちゃったんだもんって……相手は？」

「よく知らない人。ネットで知り合って、何回かエッチしたら捨てられちゃったの。携帯もメールも通じなくて……」

光希は両の拳でテーブルを叩いた。紅茶がこぼれて、美希は縮こまる。

「殺してやる……俺の可愛い美希ちゃんを……よくも……」

光希は息も絶え絶えに、うめくように呪詛の言葉を吐き続ける。

ただならぬ殺気を感じた美希は、

「……って、言ったら驚くよね、普通のパパなら」

と、舌を出して見せた。

「なんだ、どつきりか。パパをからかっちゃだめだぞ、こいつ」

光希は人差し指で美希のおでこをつつく。

「でもね、本当にあたしのお友達が妊娠しちゃって、その子のパパもママもすごく怖い人で……」

「なるほど、カンパしてやりたいんだな。美希ちゃんは優しいから

な。で、いくらぐらいいるんだ？」

美希はピースサインのように指を二本立てた。光希は早速札入れから二枚取り出そうとつまんだが。

「……十万。二十万円ほど、貸していただけないでしょうか、パパ様」

光希は怪訝な顔で札入れを引っこめる。

「美希ちゃんが妊娠させたわけでもあるまいし、どうしてそんなに必要なんだ？」

「その子のパパとママってね、怖いっていうか、本物のDVな感じで、妊娠なんてばれたら殺されちゃうからって。それに、赤ちゃんを堕ろすつもりはなくて、産みたいんだって。だから、家を出る資金とか、出産費用とか諸々……」

美希は自分がスラスラと嘘をつくことに驚いていた。光希はウーンと唸って腕組みしている。

「この件はサッチちゃんに相談しちゃだめなのかい？」

サッチちゃんとは美希の母、光希の妻である。

「サッチちゃんに相談したら、相手の男とかDV親をなんとかしてあげるべきって頑張っちゃいそうじゃない。本当はそれがいいんだろうけど、話がややこしくなりそうだし」

「わかった。今回だけはパパのポケットマネーでなんとかしよう。だけどね、美希ちゃん、その子とは少しずつ距離を置いたほうがいいかもしれないな。かわいそうに思うかもしれないけど、美希ちゃんがその子の人生を背負うことは出来ないんだからね」

——喫茶店を出ると辺りは暗くなっていた。お金の件がなんとなく、美希の足取りはほんの少しだけ軽かった。光希の腕に絡み付いて歩いていると、すれ違う一組のカップルに目が行った。脂ぎった中年のおじさんとケバケバしいお姉さんが同じように絡まって歩いていた。『社長さん』とお店に向かうところなのだろう。

「光希君、それ、持りたい」

光希の腕を放して、おみやげにテイクアウトしたケーキの箱を受

け取る。

「あはは、ちびっ子みたいだな。落とさないでちゃんと持って行けるかな？」

光希が美希の頭をわしわしとつかむように撫でると、美希の目からふいに涙がこぼれ落ちた。

「どうした美希ちゃん？ あ、ごめん、髪型崩しちゃったか？」

「……そんなことないよ。……なんであたし、泣いてるんだろ。……」

……馬鹿みたい」

光希は美希を抱き締めた。

「パパに嘘ついてるだろ？」

美希は光希の胸に顔をうずめ、コクリとうなずいた。

「……ごめん」

繁華街の人混みの中、好奇の目にさらされる二人。それでも光希は美希の後ろ髪を撫で続ける。

「……いいよ、美希ちゃんの思ったとおりにやってごらん。パパはいつだって美希ちゃんの味方だからな」

美希はケーキも鞆も投げ出して光希にしがみつく。そして、火が付いたように泣き続けたのだった。

翌日。美希は結局お金を借りなかった。登校の仕度を済ませると、光希からお下がりでもらったICレコーダーをブレザーの内ポケットに忍ばせ、自分の頬をパンパンと叩いて気合いを入れた。

――放課後、沙也香に用があると話しかけると、夏美も寄ってきて、三人で旧校舎に向かった。

「なんだ、昨日の今日でもう金できたのか？ やればできんじゃない」
沙也香が右手を出して受け取る体勢になった。美希はその手を両手で包みこんで、沙也香の目を見つめる。

「あたし、売春なんてしたくない。パンツを売るつもりもない。親のお金を盗んだりしたくないし、だからあなた達にあげるお金は無いの。もう許してもらえないかな？ あたしがいい奴ぶってしゃしゃり出て、うざかったなら謝るから」

夏美が問答無用で蹴りを入れてくる。よろけた美希は積みである机に当たって大きな音を立てる。

「いたたた。もう、いきなり蹴らないでよ」

「てめえ、なにペラペラしゃべくってんだ。開き直ったつもりか？」

夏美がグーで殴りかかろうとして、沙也香が制止した。

「ちょっと待て、こいつなんか変じゃね？ 誰に説明してんのかな？」

夏美に羽交い締めになれ、沙也香に身体検査されると、ICレコーダーがばれてしまった。ICレコーダーは踏みつぶされ、沙也香が携帯で仲間を呼んでいる。

「おまえ、絶対逆らえないように教育してやるから」

すわった目をして美希の顔に唾を吐きかける沙也香。美希は拭うこともできずにただ震えるだけだった。

――しばらくすると、いつもの取り巻き達が集まり、いじめっ子は六人になった。取り巻き達は亮輔を連れてきていた。

「ちょっと奥いこうか」

沙也香について一行は階段を上がり、四階の一番奥のほうまで進んだ。旧校舎自体が立ち入り禁止になっているが、三階から上に向かう階段にはバリケードがあつて、秘密の抜け道を知らない者は誰も通れない。つまり、泣いても叫んでも誰も助けにこない場所なのだ。

早速床に転がされた二人は、いやと言うほど蹴飛ばされる。普段は服で隠れる場所ばかりを狙って暴行されてきたが、この日は顔も手脚も容赦なく痛めつけられた。

涙と鼻血を垂れ流し、苦痛で意識が薄れる中、美希がうめく。

「ごめんね……亮輔君……あたしのせいで……とばかり……」

亮輔は鼻血を手の甲で拭い、美希に微笑んだ。

「いいんだ……元はと言えば……僕のせいだし」

「うは、亮輔さんかけー。なに、お前らそういう仲だったの？」

夏美は亮輔をヘッドロックしてからかう。

「いや、そういう仲っていうか……僕が一方的に……」

「ちょ、きめえ！ なにポツと頬を赤らめちゃってるわけ？ って

か、なんで勝手にしゃべっちゃってんの？」

夏美はヘッドロックしたまま机と椅子の山めがけて走り、亮輔を放り出す。倒れこんだ亮輔をさらに足蹴にする。

「……いい加減にしろよ。パンツ丸見えだぞ、馬鹿女」

亮輔は夏美の足をつかんだ。夏美はその手を振りほどけず、二本指で亮輔の目を狙った。

「目とか狙ってんじゃねえよ。おまえ、本気で頭おかしいな」

亮輔は夏美の手を払って立ち上がった。そのまま夏美の喉をつかんで黒板に押しつけた。

「お、おい……亮輔のくせに何強がってんだよ……あたしに逆らってたで済むと思うなよ」

背後から椅子を持って忍び寄る取り巻きに、亮輔は容赦ない蹴りを入れた。腹を蹴られた女生徒はたまらずその場に座りこんだ。

「調子に乗んな！」

夏美は背後から蹴りを入れようとしたが、亮輔は身体丸ごとの体当たりで夏美を弾き飛ばす。夏美の後頭部と黒板が鈍い音を立てて衝突した。亮輔は夏美の胸元をつかみ、往復ビンタをはった。

「女相手だからと思ってたけど、おまえはちよつとやり過ぎだ！」唇の端と鼻から血を出す夏美。亮輔がさらに振りかぶると、怯えたように目を閉じて小さくなる。

「亮輔、ちよつとタイム」

沙也香はのんびりした調子で亮輔を制止した。

「おまえ、夏美相手に結構やるじゃん。さすがは男だな。見直したよ」

亮輔の豹変ぶりに圧倒されていた空気が緩んだ。美希はポケットティッシュを出して亮輔の顔を拭く。

「いてて……僕はいいから、美希ちゃ……大沢さんも自分の顔拭きなよ」

美希は微笑んでうなずき、自分の鼻血やら涙やらを拭った。

「美希って呼んでくれていいよ？」

「ほ、ほんと？」

亮輔は会心のガッツポーズをした。

沙也香は亮輔の後に立ち、両肩に手を置いた。

「さて、男らしい亮輔をあたし達がいじめるのは無理だとわかった。でも、あたし達は美希をきっちり教育しなくちゃならない。そこで提案がある」

沙也香は亮輔に内緒話をする。

亮輔は取り乱して聞き返す。

「や、やれって……なんだよ……」

「とぼけることないって。おまえさ、小学校の頃から美希の縦笛とか体操着とかに悪戯してたじゃん。いつも美希のこと尾行して、ストーカーなんだろ？ 美希はあたしの奴隷だからさ、あたしが許すよ。今ここで、美希を大人の女にしてやってくれ」

いつの間にか、取り巻きの一人がビデオカメラをかまえていた。
「ちゃんとやれたら仲間にしてやるよ。美希の飼育係としてさ、いつでもこいつを好きにできるんだぜ？」

亮輔は怖ず怖ずと美希を振り返る。

「縦笛とか体操着って……ほんとなの？ 亮輔君」

亮輔は青ざめた顔で沙也香のほうを見る。

「恋愛ルートは消えたな。ほら、男らしい亮輔はどこいった？ こういう弱っちい優等生は、力づくでモノにしちゃえばいいんだよ」

沙也香は亮輔の股ぐらをガッシリつかんでニヤリと笑った。

亮輔は呼吸を荒げ、目をぎらつかせて美希ににじり寄る。

「亮輔君……嘘でしょ？ あなた変態さんなの？ あたしはストーリーをかばったためにずっと苦労してきたの？」

「美希ちゃん、僕、変態でもなんでもいい。ばれちゃったらしやうがないよね。君が手に入るなら、もう手段なんてどうでもいいんだ」
ブラウスの前を引きちぎられ、無惨にボタンが飛び散る。おなかの素肌に頬ずりされて、美希の肌が粟立った。

「ああ、美希ちゃんの匂いだ……体操着じゃなくて、こうやって直に嗅げるなんて……」

「うへ、超変態じゃん、こいつ！」

夏美はさっきのお返しとばかりに亮輔を蹴ろうとしたが、沙也香に止められて引き下がった。

亮輔は緊張に引きつった面持ちで、美希の顔に顔を寄せる。

「きつ、キスしても……いいかな？」

美希は横を向いてキスを避けた。

「いいかな？ とか言ってるから調子乗るんだって」
夏美に顎をつかまれて正面を向かされる。

「やめてよ……初めてなんだから……」

沙也香は美希を冷酷に見下ろして言う。

「おまえの初めては全部亮輔ご主人様に捧げるんだよ」

亮輔はゴクリとツバを飲みこんで美希に抱きつき、初めてのキス

を奪った。

「……もう……いや。……もう……なにもかも……いや！」

美希は無我夢中で亮輔と夏美を振りほどき、窓に向かって走る。

「馬鹿、ここは四階だぞ！」

美希はそのまま頭からガラスに突っ込んで窓の向こうに消えた。

美希の身体はアスファルトの地面に打ちつけられ、あちこちの関節が有り得ない方向に曲がっていた。

「ミカ……ミカ……」

美希が目を開けると、目の前にゴスロリ姿の女の子が屈んでいた。

「タナトス……ちゃん……ここはどこ？」

そこは、色とりどりの花が咲き乱れる、美しい場所だった。ゆったりと流れる大河のほとりである。

「ここは、冥府に向かう途中の特殊な空間」

「そっか、あたし、また死んじゃったんだ」

タナトスに手を引かれ、美希は起き上がる。

「あなたはまだ死んではない。生き返りたい？ それとも、もう疲れた？」

「……ちよっぴり疲れたけど、光希君も、サツちゃんも良くしてくれて、最高の家族なの。せっかく、大好きなあおの二人が家族になってくれたんだから、戻れるなら、もうちよっと頑張りたいかも」

タナトスは満足げにうなずくと、大きな鎌で空間を切り裂く。

「こっちよ」

裂け目に入ると、美希は元の身体で目を覚ました。致命傷を負ったはずの身体は完全に癒えていた。

いじめっ子達が慌てて降りてきて、美希を取り囲む。

「おい、死んだかと思っただろ！ 馬鹿！」

夏美が美希の頭を平手ではった。

「おまえ達、天使長の化身に無礼を働くとただでは済まない」
いつの間にか、美希の隣にタナトスが立っていた。

「なんだこいつ、頭いかれてるんじゃないの？ カルトか？」

夏美はタナトスに前蹴りを入れようとした。

「悪い脚、腐って落ちなさい」

夏美の脚はつま先からみるみるうちに溶けて泡立ち、骨を残してしたたり落ちた。

「なんだよ、これ！」

腐食は脚だけにとどまらず、腹を通過して四肢に伝わり、ゾンビのようになってゆく。

「いたい……あついよ……たす……けて……」

仲間のほうに這っていこうとするが、みんな後ずさりして追いつけない。

「薄情者……いやだ……あたしだけ死ぬなんて……いやだ！」

下半身がもげた身体でクロールするようにあえぐ夏美。絶叫しながら闇雲に走る仲間達。逃げた五人はそれぞれに、何かに衝突して倒れた。そこにいたのは五体のグリムリーパー（死神）、ボロ布をまとった骸骨だった。

「なんだよ、これ！ こっちくん、化け物！」

リーパー達はキーヒツヒと甲高い笑い声を上げ、五人を追い回す。五人は一カ所に追い詰められ、背中合わせになった。リーパー達は大鎌を振りかぶり、五人の首をはねた。五人の首は転がり、お互いにお互いの生首を見て気絶したのだった。

「……いい気味だぜ」

旧校舎四階から眺めていた亮輔だったが……。

「女の敵」

「だ、誰だ！」

床を抜けて現れたタナトスは亮輔の股間をつかみ……。

「やめ、やめてくれ！」

嘔吐するほど絶叫して気を失ったのだった。

——翌朝、いじめっ子プラス亮輔の七人は教室で全裸で気絶しているところを発見されたが、命に別状は無かった。ただし、薬物使用やいがわしい遊びを噂され、彼女らの影響力を恐れる者はいな

く
な
っ
た。
。

第二章

平和な学校生活に戻った美希は、再び学校一の人気者の座に返り咲いていた。ピアノの先生にも事情を説明し、また通えることになった。制服の衣替えも済んだ初夏の日、突然、転校生が現れた。

「木崎ラファエルです。よろしくです」

金髪のツインテールで、冷たい感じがするほどに均整の取れた顔立ちの女の子だった。スタイルも良くて脚が長く、同じ制服を着ているのにまるでアメリカのポップアイドルみたいだ。

ラファエルは大きなストライドでスタスタと歩き、突然美希の顔を熱烈に抱き締めた。中学生としてはかなりふくよかな胸が美希の顔を包みこむ。

「ミカ、会いたかったですよー！」

「は、はい？ ……木崎……さん？」

ラファエルがなかなか放してくれないので、美希はボケーツと考え事をしていた。ミカって呼ばれたのは初めてじゃない気がする。そうだ、この前の臨死体験のときに……。そういえばあのタナトスちゃんはどこに行ったのだろう。

ふいにラファエルの腕が緩んだかと思うと、唇に柔らかな感触が押し当てられた。男子達がうおお！ と、雄叫びを上げ、女子達が悲鳴を上げる。

「なに？ なんなの？ なんで？」

キスされたことに気付いた美希は正気に戻ってラファエルの肩を押し返した。

「あ、ごめんなさい。ミカは記憶を無くしてしまいましたね」

ラファエルは振り返ると、美希の隣の席に座っている男子の両肩をつかんでニッコリ微笑む。

「ここに座ります。わたし、ミカの隣がいいです」

「え、でも、そんなのってありなのかな？」

男子が先生のほうを見て助けを求めていると、ラファエルはさつさとその膝に座ってしまった。

「や、やわらけ、いいかほり……」

人間椅子にされている男子が鼻血を噴き出しそうに茹だっていると、男子諸君から大ブーイングが起こった。

「ま、まあ、いいから、よけてやれ。授業が始められん」

先生がそう言うとならファエルは少し腰を浮かせ、人間椅子はあたふたと這って逃げた。

そして、そのまま担任が受け持つ数学の授業が始まったのだった。

かなり破天荒なキャラにもかかわらず、ラファエルはすぐに人気者になった。休み時間がくるたびに質問責めに遭い、あちらこちらを女子達に案内されていた。ようやく質問の機会が得られたのは放課後だった。

「ミカ、一緒に帰りましょう！」

「うん、いいけど」

ラファエルの長いストライドでスタスタ歩かれると、美希は追いつくのでやつとだ。

「木崎さん、ごめん、ちょっと速いよ」

「あ、ごめんなさい。じゃあ手をつなぎましょう」

「え、でも……」

ラファエルはさつさと美希の手をとってつなぐと、お互いの腕がブラブラする距離を保ってゆっくり歩いた。

「木崎さんはスタイル良くて、脚長くて、いいな」

身長差のせいもあるが、比率的にも結構違う。

「あはは、ガブちゃんほどではありませんよ。そうそう、わたしのことは、ラファエルと呼んでください」

「そうだ、あなたに訊きたかったんだけど、なんであたしをミカと呼ぶの？」

ラファエルは当然のように言う。

「前世ではミカ、ラファエルと呼び合う間柄だったからです。あなたは天使長ミカエル。わたしは熾天使（してんしーセラフ）ラファエルです」

タナトスとの件でいくらか予備知識があった美希はさほど驚かなかった。そのまま美希は前世についていくつか質問した。すると、ラファエルは言った。

「ミカが望むなら、天使長の記憶と力を呼び戻すことができます。わたしは今、天界の評議員だから」

「ここまで聞いちゃったら、続きが気になって仕方ないわ。それ、お願いできるかしら？」

「わかりました。まず、目を閉じてください」

言われたとおりにすると、ラファエルはブチューとキスをした。

これは儀式なのだろうと、美希は耐えていたが、

「やっぱりミカは可愛いです。いけない気持ちになります。ムラムラしちゃいます」

儀式が終わったのかと目を開けて、前世とやらを思い出してみるのが、何も思いだせない。

「ねえ、あなたインチキ霊媒師？　そうやって女の子を引っかけて歩いてる人なの？」

「怒った顔も素敵ですが、わたしはまだ何もしてません。ちょっと耳を貸してください」

耳をなめられやしないかと警戒しつつも、美希は耳を貸す。

ラファエルは神妙な顔で咳払いを一つして耳元でつぶやいた。

「あなたは全てを覚えているのに、何故思い出さないのですか？

あなたは最も神に近い力を持っているのに、何故使わないのですか？」

美希の中でラファエルの言葉が何度も木霊のように反響した。気が遠くなってラファエルに抱きかかえられると、ラファエルが唇をとがらせて迫ってくる。

「ラファエル、人前でチューしてたらガブちゃんに怒られるよ！」

美希はラファエルの顔を手のひらで受け止めた。まるで条件反射のように慣れた手付きだった。

「ああ、ミカのガードが硬くなってしまいました。これは誤算です」
「なんだかこの感触、なつかしい……やだ、ほんとにラファエルだ……」

いつの世にも親友として、時には家族や恋人として生きてきたパートナーだった。前世では転生のタイミングがずれて出会えなかったため、数百年ぶりの再会ということになる。どちらからともなく熱い抱擁が交わされ、涙を流し合った。そして、いつもどおりにラファエルがミカの唇を狙い、ミカはその顔を鷲づかみで止める。

「地上では同性愛への偏見が強いから、気をつけないとだめよ」

「おお、それは残念です」

手をつないで歩き出そうとした二人の前にタナトスが現れた。

「あ、タナトスちゃん、このまえはありがとう。あたしね、全部思い出したのよ。これからもよろしくね」

タナトスは返答せず、ラファエルを凝視している。ラファエルはジリジリと後ずさりして美希の後に隠れる。

「あ、あの……タナトスちゃん？ ラファエルがどうかした？」

「わたしは天界に大沢家の護衛を依頼した。力を戻せとは言っていない」

ラファエルは目をそらし、上ずった声で言う。

「ミカが思い出してくれないとつまらないです。それに、自分の身は自分で守ってもらったほうが合理的です。さらに言えば、ミカに關しては天界の問題です。今まで大沢家の護衛を買って出ていたことには感謝しますが、ミカをどう扱うかまで指図される覚えはありません……」

タナトスは顔を伏せ、肩がワナワナと震えている。

「確かにこれは内政干渉。でも、わたしはミカに重荷を背負わせたくなかった。熾天使ラファエル、これだけは言っておく……」

タナトスは顔を上げ、ビシッとラファエルを指差した。

「は、はい……?」

「あなたの慌てた顔はとても可愛い。剥製にして部屋に飾っておきたいぐらい」

ポカーンとする二人。きしむような動きで口角を上げて微笑むタナトス。

「わたしは魔界に戻ってバフォメットといいことをする。ラファエル、ミカを頼みます」

タナトスは二人に背を向けると、クックククと笑い声を漏らし、空間を裂いて消えていった。

「あの人はいったい……」

「たぶんね、ラファエルのこと気に入ったんじゃないかな。可愛い子が好きだから」

「死神ジョークは難しいです。わたしには理解できません……」

「そうかな? 強引なところとか、女の子が好きなのところとか、結構似てるんじゃないの?」

「わ、わたしは魅力的な人が好きなのです。女の子を特に好むというわけではありません。そもそも、わたし達天使は中性であり、かりその肉体が男であるとか女であるとか、そんなのは問題じゃないはずですよ!」

美希はラファエルの顔をしげしげと見る。

「なるほど、ほんとに慌てた顔が可愛いかも」

「ミカはどんな顔してても可愛いですよ」

そのまま抱きつこうとするラファエルを美希はサラリとかわし、駆けだした。キャツキャとはしゃいでじゃれ合う二人は、そのまま大沢家に向かったのだった。

ラファエルはそのまま大沢家に住み着くことになった。美希の両親には姪っ子だと思い込ませてある。サッチャんの姉夫婦が転勤で引っ越し、学校を移りたくないラファエルを叔母宅で下宿させる。そういう設定である。そもそもサッチャんは一人っ子で、そんな家族構成は嘘っぱちなのだが、問題なく騙せたようだ。

「サッチャん達に嘘をつくなんて気が引けたけど、あの様子なら問題無いね」

タナトスに引き続き、サッチャんもラファエルを気に入ったようだった。大きくなったわね〜と、本物の叔母みたいなセリフを言っていたが、テンションの上がりかたが凄かった。マックスであった。結局、二人が美希の部屋に戻れたのは日付が替わってからだった。

「さすがに家を勝手に建て替えたりはできないし、どうしよう」

大沢家は3LDKであった。両親の部屋と、美希の部屋、客間があるが、客間と両親の部屋は一階にあって隣合っている。

「うちはまだ弟か妹ができる可能性が高そうなの。短期間のお客さんならあの二人もさすがに我慢するだろうけど、長期間あの客間に住むのはお勧めできないわ」

「それは興味深いですが、邪魔になっではいけませんね。ミカの部屋で一緒に寝るしかありません。しかも、この部屋にはアップライトピアノがあって布団を敷くスペースが無いようです。これは困りました」

もっともらしいことを言いながら鼻息を荒げるラファエル。

「幸いなことにミカのベッドは広めなのですが、暑くなってきたこの季節、若い娘が汗だくの濡れ濡れでくっつき合って眠るなんて夢のような……」

「馬鹿なこと言ってないで、ほら、これ着てみて」

美希のパジャマをラファエルが着ると、胸がきつくてボタンを止められず、今にも張り裂けそうなズボン七分丈のカプリパンツみたいになっていた。

「やっぱり、どう見てもSサイズなんて無理だね。サッチャンの借りてもいいけど、サッチャんって基本、エロいのしか持っていない……」

ラファエルはパジャマを脱いでたたむと、下着姿のままベッドに入った。

「わたし達は天使だから汗かいても布団汚れません。臭くないし、ばっちくない。だから、ミカも裸で眠るべきです。ほら、このスベスベ、そしてフリーダム」

布団の中で後ろ手にゴソゴソやって、ホックをはずすラファエル。美希を挑発するかのようにブラジャーをポイツと投げてよこす。

「フリーダムじゃない！ お馬鹿！ エロ天使！ 光希君のTシャツ借りてくるから待ってなさい」

「えー、光希パパいい人だけど、おっさんのくっさいシャツは嫌ですよ」

「光希君はおっさんじゃないし、臭くないもん！ わがままばっかり言うなら追い出すよ！」

ラファエルは唇を尖らせていじけながら、空中に十字を切ってTシャツを物質化した。

「あ、そっか。十四年も地上人やってたから忘れてた。着替えの面倒見る必要なんて無かったんだ」

ミカが統治した時代から、物質化の制限は解除されていた。使えるものはなんでも使えばいい。全能なる創造神が、使ってはいけない力を与えるはずがない。それがミカの持論だったのだ。

「ミカは地上人をやっていたせいで堅くなりました。口うるさくて、まるでガブちゃんみたいです」

「そういえば、ガブちゃんとメッティは元気にしてる？」

「はい、二人とも元気でバリバリ働いてます。わたしがミカの代理

で神の座を引き継ぎましたが、この性格ですからね。あの二人が天界を支えているようなものです」

パジャマに着替え終わったミカは電気を消してベッドに入った。

「夏休み中にでも一度天界に行ってみようかな」

「はい、みんなミカの帰りを心待ちにしています。ガブちゃんにもその頃には一度戻るようにと言われてますし……」

急に静かになったかと思えば、ラファエルは喋りながら寝てしまったようだ。

「……ちびっ子みたいね。おやすみ、ラファエル」

——美希はミカだった頃の夢を見ていた。

天界で一人暮らししていた家に、深夜の来客があった。

「明日は早いのに……寝坊したらガブちゃんに怒られちゃう……」

チャイムで起こされて眠い目をこすりつつ、玄関ドアののぞき窓を確認する。

「え？ サツちゃん？」

意表をついた嬉しい来客に、ミカはドアを開け放つ。外は見事な月夜で、闇に慣れた目が痛いほどだった。

「いつ力が戻ったの？ あれ、もう赤ちゃん産まれた？ とにかく、入って入って」

地上人として光希との子を宿し、大きなお腹をしているはずの時期だったのだ。それが膨らんでいなかった。なんだか変だなと思いつつも、ミカは背を向けて先に歩き出したのだった。

そして、背後から刺された。

赤黒いオーラをまとった二本の刃が、貫通して胸から飛びだしていった。

「サツちゃん……どうして……？」

「あの人を奪った……おまえが憎い……エヴァ……許さない……」

サツちゃんは悲鳴のような咆哮を上げて、何度も何度もミカを突いた。ミカは血を吐き、痛みとパニックで涙が溢れ、ろくに抵抗で

きないまま床に崩れた。

「……痛いよ……やめ……てよ……」

——美希は揺り動かされて目を覚ました。

「ミカ、大丈夫ですか？ 怖い夢を見ましたか？」

美希は寝ぼけたままラファエルにしがみついていた。ラファエルは抱き返し、美希の髪を撫でて慰めた。

「ラファエルはあたしが死んだ時の状況って聞いてる？」

「はい。謎の多い事件として、十四年経った今でも語り継がれています」

「争った形跡も無く、背後から滅多突きにされて玄関で絶命。そんな感じかしら？」

ラファエルは驚いたように美希の肩をつかんで問う。

「犯人を思い出したんですか？」

「そうみたいなんですけど、ちょっとまずい相手かもしれないの」

「まずいというと？」

美希はウーンと唸って黙りこむ。

「知り合いですか？」

「まあ、そうなんだけど、夢なんて曖昧なものだし、もうちょっと確信が持てたら話すね」

「気を持たせて教えてくれないなんてずるいです」

ラファエルはがっかりしてみせたものの、美希の困った顔を見て深追いはしなかった。

サツちゃんが階段下から「そろそろ起きなさい」と、声をかけてくる。美希は一瞬ためらってから、「はい」と、答えたのだった。

美希とラファエルは学校に着くと、校庭に妙なものがあるのを見つけた。校庭のだ真ん中に、樹齢何万年かというほどの巨木が生えていたのだ。奇妙なことに、他の生徒達も教師も、誰もそのことに触れなかった。それどころか、サッカー部は朝練をしていて、巨木をすり抜けながら走り回っていた。

「なんなの、あれ？ 明らかに地上のものではなさそうだけど、天界でも見かけない樹みたいだし」

ラファエルは巨木の幹を撫でたり叩いたりして、品定めしている。ラファエルと美希にとっては、触れることのできる、実体のある樹なのだ。

「おい、その女子二人！ 邪魔だぞ！ なにやってんだ！」

サッカー部のキャプテンが怒鳴る。

「行こ、ラファエル」

ラファエルは指先から極小の光弾を放って枝を一本折った。それをキャッチして、美希に続く。

二人はそのまま旧校舎に向かった。

ラファエルは携帯で天界に電話をかけ、空中に描いた十字を通じて枝を送った。

「詳しいことは調査しないとわかりませんが、あれは恐らくミカに寄生していたものと同種の……」

美希は泣きそうな顔になり、ブルブルと震える。

「寄生って……あたしに何かついてるの？」

「はい、あれは樹に見えますが恐ろしい虫で、ミカはもう少しで巨大ミミズのようなお化けに中から食い荒らされて……」

美希はヒーンと悲鳴を上げて駆けだしそうになるが、ラファエルに首根っこをつかまれてじたばたしている。

「と、いうのは冗談です。でも、たしかにミカにはあの樹の小さい

やつが寄生していました。地上の人間には見えませんし触れられませんが、タナトスさんが気付いて駆除してくれました。そのサンプルも天界の研究所に保管されています」

「で、その樹は何か悪さをするの？」

「はい、これもまだはつきりと解明されたわけではありませんが、あの樹は恐らく人の幸運を吸い取るのだろうということです」

「そっか、それで急にいじめられるようになったり、いろいろついてなかったんだ」

「そのとおりです。ところで、ミカは前世で神様だったときに、光希パパとサツちゃん、それと、お腹の中の子を特別に祝福しましたね？」

美希は気まずい顔になる。

「大天使会にばれて始末書を書かされたのよね。二人が生まれたときに名前に細工したり、二人がいずれ出会うようにしたり、幸運に遭遇する確率を倍に増やしたり、お腹の中の子は三倍にしたんだっけ。今思えば、確かにやりすぎだったかも」

「その、幸運三倍のチートな赤ん坊は誰ですか？」

「あ、そっか、あの子があたしなんだ。自分で自分を祝福したなんて不思議なこともあるものね」

「まあ、最後の最後まで魂が入らずに空席になっている胎児というのはいます。それはいいとして、幸運三倍のミカをめぐって、どこかの異世界からあの樹がやってきたのではないかと推測されているわけですよ」

美希はまた青ざめて震え出す。

「っていうことは、あのでっかいのもあたしに寄生してきたの？」

「あの樹に訊いてみなければわからないと言いたいところですが、訊いてもわかりませんでした。あの樹は意思をもっています。何者かがあの樹を使って幸運を吸い上げ、エネルギーとして取り出すという仕組みなのかもしれません」

「天界でも地上でも魔界でも地獄でも、あんな樹は見たことないわ。」

っていうことは、あの樹も飼い主も、あたし達が知らない異世界からきたの？」

ラファエルは神妙な顔でうなずいた。

「とりあえず、そのまま異世界樹、異世界人と呼んでいます。ミカや光希パパは異世界人に何度か襲われかけて、タナトスさんやバフオメットさんに救出されています」

ラファエルは突如、胸ポケットからボールペンを取り出して投げた。空気を引き裂いて凄まじい風切り音を上げながら、開け放った教室の入り口を通り抜け、廊下の壁に刺さる。

「出てきなさい、変態さん」

美希をストーキングしていた亮輔が、怖ず怖ずと這って教室に入ってくる。

「あの壁、コンクリートだぞ……ありえねえ……物理的にありえねえ……」

ラファエルは目にも止まらぬ早業で亮輔をヘッドロックし、ポカポカとゲンコツをはった。

「どこから聞いてましたか？ まったく、たちの悪い変態さんです」

美希が亮輔の顔をのぞきこんでみると、亮輔はホワーンと幸せそうな顔をしていた。

「ラファエル、なんかこの人喜んでるよ」

ラファエルは飛び退いて豊かな胸をかばい、とがめるような視線で亮輔を見る。

「地上の男の子は変態過ぎです。わたしには理解できません」

あんたが言うかという顔をラファエルに向けつつ、美希は亮輔に歩み寄る。

「それで、あたし達に何か用なの？ それともまたストーカー？」

美希は拳を鳴らして凄んで見せる。そして、ピアノの先生に「指を鳴らしてはだめよ」と言われたことを思い出す。でも、今日だけだからいいやと凄んでにらむ。

「あ、あの、君達なかなか興味深い話をしていたようだね。天界、

魔界、地獄に異世界……君達は天使なんだって？　よかったらその辺の話をもっと聞かせてよ」

美希はため息をついてラファエルを見る。

「消すしかないかな？」

「そうですね、彼は知りすぎました」

美希が記憶を消す呪文を唱えようと近付くと、亮輔は尻もちをついて後ずさる。

「痛くないから、ちょっとだけ大人しくしてね」

「う、嘘だ！　やめてくれ！　殺さないでー！」

亮輔は思いついたようにポケットからデジカメを取り出した。

「こ、これに異世界樹が映っているんだ！　美希ちゃんに取り憑いてたやつ！」

美希はカメラを受け取り、ラファエルと二人で液晶画面をのぞいた。美希の頭のとっぺんにちょんまげぐらいの大きさを樹が生えていたのだった。

「あ、こんなちっさい樹だったんだ。なんか可愛いね」

「最終的には着ぐるみを着て歩いてるような状態だったそうです。駆除するにしても厄介だったので、一度コキュートスに連れていったのだとか」

「コキュートスって、冥府の入り口のことだっけ。そっか、肉体を一時的に仮死状態にすることで異世界樹君が用済みだと思って出ていったんだ。さすがはタナトスちゃん、怖いけど合理的な方法だね」
抜き足差し足で出ていこうとする亮輔を、ラファエルが捕まえる。
「で、この写真がどうしたのですか？」

「ぼ、僕はその、心靈写真を頻繁に撮ってしまう体質なんだ。ひよっとして念写みたいな力があるんじゃないかと……で、なんかお二人を手伝えたりできないかな」と

「念写ですか。……はい、ポーズ」

ラファエルはめんどくさそうに亮輔の写真を一枚撮った。カメラを返すと亮輔は青ざめる。

「手が……ごっちゃり……」

壁のあちこちから手が飛び出して手招きしている心霊写真だった。亮輔の両足首もしっかりとつかまれている。

「すごい力だな。ほんとに天使さんなんだ、二人とも」

「あなたはたまたま高次元の存在を念写することもあるのでしょうが、わたし達には常に見えています。あなたのような地上人が手伝えることありません。ミカに付きまとうのはやめてください」
ラファエルにシッシと邪険な手振りをされ、亮輔は肩を落として出ていった。

「あ、消さなきゃ!」

美希の声が聞こえたのか、亮輔は猛ダッシュで逃げていった。

「まあ、あの変態さんには天使とわかった上で怖がってもらったほうが、お互いのためかもしれません」

「そっか、それもいいかもね」

深夜になって、二人は校庭の巨木と対峙していた。天界からの報告によれば、異世界樹（小）と違って、（大）には寄生する能力が無いらしい。その代わりに大勢の人から無差別で幸運を吸い取って急激に育ち、幸運を濃縮した実をつけることがわかった。

「伐採に際しては何が起こるかかわからないので、十分に注意してください。って、言われてもね」

美希はメールを読み終えてラファエルに携帯を返す。

「とにかく、やってみましょう」

ラファエルは十字を切って槍を取り出した。白い柄にキラリと光る銀色の刃まで総金属製で、女の子が扱うには少々重そうに見える槍だった。

美希も十字を切って武器を取り出した。それは、白いボディにピンクのアクセントが入った可愛らしい『ロケットランチャー』だった。

「なんか、いかついのできた」

「それがあれば楽に伐採できそうですね」

ラファエルは構えていた槍を下ろして、ミカから離れた。

「さてと異世界樹君、あなたに恨みは無いけど、みんなの幸福を吸われちゃうと困るから、ちょっと退いてもらうよ」

美希が集中してオーラをこめると、砲身の前後に眩しく白い光が輝いた。

「凄いです、ミカのお馬鹿なほど強大なオーラがさらに増大、圧縮されて威力を増しています」

引き金を引くと、ドウツという音を立ててオーラの砲弾が発射された。後にも同じ勢いの爆風を発して、反動を殺す仕組みになっているらしい。

砲弾は見事命中し、異世界樹の幹に突き刺さる。すぐに内部から

爆発して異世界樹は粉々に消し飛んだのだった。

「あっさりだったね」

「はい、簡単に片付くに越したことはありません。わたし眠いです。帰りましょう」

ラファエルは左手で覆ってアワワ〜とあくびをした。伸びをした右手の槍に何かが当たって、チュインと音を立てた。どこからか飛んできた光弾を弾き返したらしく、校舎の一角に当たって爆発が起こった。

二人はそれぞれにオーラをドーム状の防壁にして身体を包む。

「誰？ 出てらっしゃい！」

「あそこ、屋上です！」

ラファエルは背中から翼を出して飛び上がった。美希も続こうとしたが、翼が出ない。

「そういえば、この身体になってからまだ出してなかったんだ」

転生後、初めての戦闘だったから、まだ翼を引き出していなかったのである。

「おびき出します。ミカはそこで発射準備しててください！」

ラファエルは槍をかまえ、屋上の人影に突撃する。人影は剣で受け止めたが、力負けして尻もちをついた。ラファエルはすかさず喉元に切っ先を突き付ける。

「捕縛」

白いオーラのリングで両腕ごと胴体を拘束した。人影は深緑色のトカゲ人間だった。

「あなた怯えていますか？ あなたが悪いことをしなければ、わたしは何もしません」

ラファエルはトカゲ人間を連れて美希のもとに戻った。

「アーリマン！」

美希は驚愕の面持ちのまま、ランチャーをかまえる。

トカゲ人間は闇雲に首を振って後ずさりした。

「待ってください。この人、怖がってます。そんなに危ない人では

なさそうです」

美希はランチャーを下ろし、トカゲ人間に訊ねる。

「あなた、アーリマンじゃないの？」

「アーリマンとは名前なのか？ 私達リリンは個別の名前など持っていないが」

美希はトカゲ人間を上から下までなめるように観察した。記憶の中のアーリマンはもっとマッチョな体付きで、凶悪な面構えをしていたなと思い返す。

「あなた達はリリンという種族なのね？ どこから来たの？ 目的は人々から幸運を奪い取ること？」

「私達はリリスの子リリン。惑星ニビルからやってきた。目的は幸運の実の栽培と、エヴァ、あなたを……」

突如、一筋の雷光がリリンを撃った。リリンは黒こげになりながらひざまずき、天を仰いだ。

「喋りすぎたようだ……リリスが呼んでいる……」

リリンの身体は砂のようになり、バフツと爆発して消えてしまったのだった。

それから数週間のうちに世界各地で異世界樹（大）が発見され、天界や魔界の有志達が伐採にあたっていた。リリンと戦闘になった者もいたが、いずれのリリンも戦意に乏しく、捕らえて情報を得ようとすれば雷に撃たれて消滅した。

美希達の学校が夏休みに入ったこともあり、二人は天界に帰省することにした。

「光希君とサツちゃん、置いてって大丈夫かな？」

「二人の携帯はオーラセンサー対応なので平気です。半径二百メートル以内で攻撃的オーラを感知したら、わたし達の携帯にお知らせメールがきます」

美希の携帯もとっくの昔に天界の携帯とすり替えられていた。地上人との通話はもちろん、魔界、地獄でも通じる優れものだ。オー

ラセンサーは子どもや戦闘に長けていない者を守る目的で開発されたシステムである。これまでも、天界、魔界の仲間達はこれを使って大沢家を守ってきたのである。

「じゃあ、行ってきまーす」

美希が声をかけると、キッチンにいたサツちゃんが駆けてくる。

「これ、姉様に持っていてちょうだい。いい子にして、姉様の言うことちゃんと聞くのよ？」

「はい」

保冷バッグに入った梅屋のどら焼きを渡された。サツちゃんの架空の姉、ラファエルの母のところに旅行するという設定になっているのだ。

二人は玄関を出てしばらく歩き、周囲に人がいないことを確認する。空中に大きく十字を切ってくぐれば、そこはもうラファエルの家だった。

第三章

「あれ、ここってあたしが住んでた家？」

「そうです。ミカの強大な崇りを恐れて借り手がつかなかった物件を破格で借りています」

「崇りだなんて、失礼な話ね」

「ひどい最期だったようですからね。天使ともあろう者が靈魂を恐れるなど馬鹿げていますが、仕方のないことです。ミカがお化けになつたら、誰も手がつけれないですから」

室内に直接ワープしてきたので、改めて玄関を見に行く。

「ちよつと、なにこれ！」

玄関を上がつてすぐの床に、人型に張られた白テープがあつた。

明らかに、被害者をかたどつたものだ。

「わたしはミカと出会うのを楽しみにして生まれてきました。でも、物心ついたときには、ミカは既に悲劇のお姫様として語り継がれていた。せめて親友のわたしが犯人を捕まえてあげようと、毎朝ここを通る度に決意してきたのです」

「そっか……」

美希は感じ入ったように神妙にしゃがみこみ、自分の現場を確認する。

「ねえ、このOUCH！　って何？　ってというか、落書きだらけじゃない」

人型テープからは幾つもの吹き出しが出ていて、「ラファエル大好き！」とか、「床冷たいよー」とか、好き勝手なセリフが書き込まれていた。

「落ち込んだ夜にはここに座って、ミカと語り合っていたものです。たまに、この枠に重なって一緒に寝たりもししていました。会いたかったですよ、ミカ」

「いい話みたいにしてもだめ。人の死をからかうなんて、ひどい

やつ」

プイッとそっぽを向いた美希の腰に手を回し、ラファエルはエスコートする。

「ミカの寝室はそのままにしています」

白とピンクでコーディネートされた可愛らしい部屋は、寸分違わず当時のままだった。机の上に電報の束が積んであって、美希は早速手にとってみる。美希として地上に生まれたときに、天界の仲間達から届いた祝電だった。

「ミカを失ったときの天界はひどい落ち込みようだったそうです。そして、ミカが転生したと判明したとき、その熱狂ぶりもまた凄かったようですね」

椅子に座って一通一通目を通しているうちに、鼻をぐずぐずいわせる美希。名も知らない市民達からも暖かいお祝いのメッセージがたくさん寄せられていて、前世でやってきたことが報われた気がしたのだった。

「さてと、あっちでお茶でも飲みながら作戦会議しましょう」

ラファエルに手を引かれてリビングのドアを開けると、あちらこちらからクラッカーを浴びせられた。

「おかえり、ミカ」

ガブリエルにメタトロン、大天使会や友達が大勢集まっていた。美希は早速、ガブリエルに抱きつき、メタトロンに頭を撫でられ、仲間に揉みくちやにされた。そして、パーティーは深夜まで続いたのだった。

パーティーが終わってみんな帰っていった。ラファエルはソファで眠ってしまい、美希とガブリエルの二人でようやく後片付けを終えたところである。

「ラファエル、風邪引くよ」

美希はタオルケットを持ってきてラファエルにかけた。

「あ、そっか、あたし達風邪なんか引かないんだった」

ガブリエルは食卓テーブルについて、コーヒーを飲んでいる。美希は向かいに座り、パーティで残ったジュースのペットボトルを開けた。

「ミカに言っておくべきことがあるの。天界の長としてのあなたに」「どうしたの？ 何か大変なこと？」

ガブリエルは目と目の間を揉みほぐし、ゆっくりとため息をつく。「地上の破滅が間近に迫っているの。あなたが倒した異世界樹と同様のものが地上世界を侵食していて……。それだけじゃない……。主要な国家元首や閣僚達がことごとく異世界人、リリンに入れ替わっているのよ」

美希はポカーンとしてガブリエルの顔を眺める。

「……でも、今朝までいた地上はそんな大変な状況じゃなかったよ
うな」

「地上のあちこちで謎の暴動、謎の内戦が起きているんだけど、マスコミはそれを全く報道していないわ。突然歯車が狂ったように不運になった人達が暴れだし、乗っ取られた政府が軍を使って対抗、虐殺している。でも、地上人には異世界樹もリリンも見えないから、自分たちが何と戦っているのか、何故戦っているのかを全く理解できていないの」

ガブリエルはテレビのスイッチを入れた。天界のテレビでは、どのチャンネルをかけてもそのニュースばかりだった。どこかの大統領のふりをして、トカゲ人間が記者会見する光景。鉄パイプや拳銃で暴れる市民を戦闘機や戦車が虐殺する大惨事。

その中で、異様な人種がいるという話題になった。日本人である。日本も同様に異世界樹に侵食され、政治も乗っ取られていたが、それでも通勤通学をやめない人ばかりだった。そのかわり、度重なる飛び込み自殺で電車は終日運休状態になり、道路は大渋滞、街のあちらこちらで首吊り、飛び降り死体の処理が行われている。

「これは日本でも首都圏の状況。ミカのいた街では、まだ目立った変化は見られなかったようね。でも、地方でも自殺者や家にこもっ

て廃人のようになっている人が激増してるそうよ」

天界の長として冷静に見ようとしていた美希だが、目からポロポロと涙がこぼれ、吐き気を催して口元を押さえる。

「……ねえ、どうしてこんな大変なことを黙っていたの？ パーティなんかやってる場合じゃなかったんじゃないの？」

ガブリエルは頭を抱え、なげやりな声を出す。

「もう天界も魔界も、みんな諦めてるわ。異世界樹はね、破壊すれば終わりじゃなかった。飛び散った破片がそれぞれに胞子みたいに繁殖する力を持っていたの。それに、リリン達は擬態が得意で、もうどこまでが地上人で、どこからがリリンなのか誰にもわからない。手の施しようがないのよ」

美希は両手を拳にして握り締めた。

「……なによ、それ。なんで諦めるの？ 手の施しようがあるかないかじゃなくて、戦い続けるしかないでしょ？ ……まじめ過ぎるぐらいまじめな天界のみんなが、あんなにはしゃいでパーティーをするなんておかしいと思ったのよ。自棄になってただけじゃない！ いつから天使はそんな意気地無しになったの？」

ラファエルがむくりと起き上がる。

「ミカは駄々っ子ですか？ ガブちゃんがどれだけ悩み、懸命に働いたか考えてからものを言いなさい」

ガブリエルはラファエルのほうを見て首を振る。

「いいの、わたしだって本当はミカと同意見だわ。だけど、世界じゅうが諦めてしまってる。奇跡でも起こらない限り、この状況をひっくり返すことなど出来ないわ。残念だけど地上は放棄して、残りの三界で可能な限り地上人を受け入れる。そういう方向で世の中は動きだしてるのよ」

美希は足をジタバタと鳴らし、唸っている。

「どうせあたしは駄々っ子だし、ガブちゃんが出来なかったことが出来るわけないかもだけど、諦めたくない！ あんなわけわからないやつらに地上を好き勝手されたくない！ 異世界樹の破片が飛び

散ってふえるなら、跡形もなく消滅させればいいじゃない！」

ガブリエルは困った顔で腕組みする。

「圧倒的に戦力が足りないのよね。天使と魔族が全員出たとしても、とてもじゃないけど地上全域の異世界樹を止めることなんてできないわ。せめて地上人が力を持っていれば……」

美希とラファエルは「おや？」と、顔を見合わせた。

「ガブちゃん、なぜ、地上人に力を返さないのでですか？」

ガブリエルは首をかしげる。

「力を返す？　どういうこと？」

「ラファエル、ひょっとしてあなた、話してないの？」

ラファエルは、

「ほえ？　ガブちゃん知らなかったですか？　てっきり、返さない

理由があるんだと思ってました」

と、のけぞって驚いた。

「ガブちゃんは神性を継いだことないんだから、知ってるわけないでしょ。しっかりしなさいよ」

わけがわからないという顔のガブリエルに、美希が説明する。

「あたしがお爺ちゃんから継いで、今はラファエルが持つてる評議員の力『神性』があるでしょ？　これはただの政治的権限とか地位だけじゃなくて、代々の神の記憶とか、生きた身体で冥府に出入りする資格とか、古代兵器起動の方法とか、そういうもののなの」

ガブリエルは「ふむふむ」と、興味深そうにうなづく。神性を継いだ者は、受け継いだ記憶によって神性について知る。つまり、同じ熾天使のガブリエルといえども、神性を継いだことがないのだから知らないことだらけなのである。

「で、いま重要なのは、古代兵器について。前にあたしが魔界を撃ったオーラ砲の他にも古代兵器があって、それを使えば地上人に力を返してあげることまでできるの」

ラファエルはウンウンとうなずいて続ける。

「昔、地上人はバベルの塔を建てて天界に攻め入ろうとしました。

それを食い止めるために、天界では特殊な兵器が作られ、地上人の力を奪いました」

「共通の言語を奪って混乱させたんでしょう？」

「学校ではそう習いますが、実際はちよつと違います。地上人達も本来、わたし達と同じ力を持っていて、オーラを使ったり、物質化したりできました。その力のおかげでお互いの言語を理解し合っていた」

「なるほど、その兵器を使えば、逆に力を戻してあげることできるのね？」

「そのとおりです」

ラファエルは満足そうにうなずいた。

「じゃあ、地上人を一人一人説得して、十字や魔界の徴を与えて保護してきた苦労はなんだったのよ。勘弁してよ」

ガブリエルは気の抜けた顔で立ち上がると、冷蔵庫を漁って缶ビールを開けた。

「ラファエル、始末書ね。バフォメットさん達にもお詫びしなきゃ」

ガブリエルはやれやれという顔をしてビールをグビグビと飲み干した。そして、その場にペタンと座りこんで泣きだした。

「よかった！もうだめかと思ったじゃないのよ！ラファエルの馬鹿！」

そのまま冷蔵庫の前に陣取って数本飲んだ後、座ったまま眠りこけるガブリエルであった。

「ガブちゃんがこんなに壊れるなんて、かなり悩んでたんだよ。かわいそ」

ラファエルがぐずぐず泣きだした。その手には缶ビールが握られていた。

「……ごめんなさい……わたし、皆さんに顔向けできない……神性も熾天使の座も返上します……ミカ、あとを頼みます……」

「ちよつと、いまは一応中学生なんだからお酒はだめだよ」

美希はガブリエルとラファエルをベッドに引きずって寝かしつけ、テレビの深夜ニュースで情報収集するのであった。

翌日、朝早くから大天使会が招集され、古代兵器の使用が承認された。同時に、ラファエルから美希へ神性が返上された。これはラファエルへの懲罰というわけではなく、元々予定されていたことだ。会議が終わったその足で、美希、ラファエル、ガブリエル、メタトロンが古代兵器に向かう。ラファエルが使っていた神のオフィスでエレベーターを乗り換えると、天界の底まで下りられる。制御室に入ると、美希はメインスイッチを押してシステムを起動した。暗かった部屋が明るくなり、壁が三六〇度ぐるりと取り巻くスクリーンになった。いまは窓のように外の青空を映している。

「おかえりなさいませ、マスター」

一行の目の前に電脳少女といった風のメカメカしい服装の女の子が現れてお辞儀をしている。その顔は美希にそっくりだった。

「この子はガー子ちゃん。この部屋の防御システム兼、案内、補佐係なの」

「大昔のミカが『ガーディアン』のガー子』なんて適当に名付けたようですが、かなり強力な戦闘能力を持っています。マスター無しでここにくるのは、我々熾天使と言えども危険です」

「古代兵器というわりには、何もかも新品のように見えますね」
メタトロンが感想を述べると、ガブリエルもうなずいている。

「そうね、古代というよりむしろ未来の技術じゃないかってぐらい」
「実は、例のリリン達が作った技術なのですよ」

ラファエルが悪戯っぽく言うと、ガブリエルは「そうなの？」と、真に受けた顔になる。

「あのさ、ラファエル、ほんとに怒られるよ」

美希がつっこむのを見て、ガブリエルは安堵の表情になった。

ガー子をコントロールパネルに残して、一行は部屋の中で円陣を組み、手をつなぐ。

「ガー子ちゃん、おねがゝい」

ガー子がうなずいてパネルを操作すると、美希達の足下に魔法陣のようなものが現れ、虹色に光り輝く。

「もう始まるの？　ずいぶんシンプルなのね」

ガブリエルは何だか不満そうな顔をしている。

「マスターとガー子は精神をリンクしているので、多くを語る必要はありません。ピコピコピコ、ウィーン、ガッシャーんっていうようなのを想像していましたか？」

ラファエルがニヤニヤして言うのと、ガブリエルは「べ、べつに……」と赤い顔をした。

四人がやるべきことは魔法陣にオーラを注ぎ込むことだけだった。この役目は四大天使と呼ばれる四人の熾天使ミカエル、ラファエル、ガブリエル、ウリエルが力を合わせてやることになっているが、ウリエルがいないのでメタトロンが代役を務めている。

四人が目を開き集中すると、魔法陣が眩しく光りを放ち、その中心に六翼の天使が浮かび上がった。六翼の天使が清らかな声で歌い始めると、部屋じゅうに天使が現れ、美希達も加わって大合唱になる。天使の幻影を通して、天界じゅうからオーラが集まってくる。凝縮されたオーラは天界の底にある突起に集められ、巨大な光球になった。

「地上のみなさん、力をお返しします。目覚めてください。自分たちの手で地上を守ってください」

美希が言うと、地上の人間達は一斉に空を仰いだ。脳裏で美希の姿を見て、心の中で美希の声を聞いたのだ。

ガー子が専用のトンカチでカバーを破り、発射ボタンを押すと、巨大な光球が放たれた。光球はいくつかに分離し、凄まじい速度で飛んだかと思うと、それぞれの大陸に向けて光のシャワーを降らせた。人々は両手を広げて気持ちよさそうにシャワーを浴び、力の使い方を悟った。そして、街のあちこちに立っている異世界樹を消滅させる作業に入ったのだった。

——天使や魔界人と同等の力を得た地上人は、みるみるうちに異世界樹を片付けていった。天界や魔界と比べて地上の人口は桁違いに多いし、世界じゅうの人々がそれぞれのご近所を警戒すれば済む話だった。

暴徒対軍の内戦も、銃や爆弾が役立たずになれば形勢逆転であった。リリンやリリンに協力した売国政治家などが捕らえられ、地上は秩序を取り戻していった。

ようやく一段落ついたと四人は休暇をとり、キャンプに出かけた。メタトロンが運転するワゴン車で三十分ほど走って湖のほとりのキャンプ場に到着した。天界は雲の上にあって雨が降らないから、湖といっても水を溜めて循環している人造湖なのである。

「おやおや、皆さんおそろいで」

最高位の天使四人が一緒に行動していると、市民達の目を引いた。「ガブリエル様、わたしはこの前の騒ぎで移住してきた者なんですがね、天界はいいところだから息子夫婦や孫達を連れてきたいんですよ。こういうことはどこで相談すればいいんですかね？」

「ああ、あのときの。こちらの暮らしには慣れましたか？　そういう相談なら第五庁舎の……」

一人に答えると、どんどん市民が集まってきて、ガブリエルは臨時の陳情窓口みたいになってしまった。移民が増えたせいで役所が混乱して、生活の不安や不満を募らせている市民が少なからずいるようだ。

一方、メタトロンはテントの説明書とにらめっこしていた。

「君達は泳いでくるといいですよ。夕飯までには建てておきますからね」

「じゃあ、遠慮なく行ってきましたーす」

——美希とラファエルは更衣室で着替え、早速湖で泳ぎ始めた。美希はフリルのついた可愛らしい白ビキニ、ラファエルは黒い競泳水着を着ている。

「あっちの島まで競争です！」

「あ、待ってよ」

美希がオーラの力で優れているとすれば、ラファエルは身体能力がずば抜けて高い。金メダル級のクロールですいすい泳がれると、美希はあっという間に取り残されてしまう。

「よし、こうなったら」

美希は身体をピンと伸ばして固めると、足の裏からオーラを噴射した。人間ジェットfoilと化した美希は、ぐんぐん追い上げていく。

「ミカ、ずるいですよ」

気付いたラファエルは翼を出して飛び上がった。

「あゝ、飛ぶのなし」

ラファエルはべーっと舌を出して島にひとつ飛びした。

美希は競争を諦めて、のんびりと平泳ぎを始めた。雲一つ無い空、キラキラ輝く水面、遠くで騒ぐセミの声。冷たすぎず、ぬるくもない丁度いい水温。

「気持ちいい」

ラファエルが岩場が上がって座っているのが見える。美希は立ち泳ぎして手を振った。

そのとき、美希の足首を何かがつかんだ。

「ちょっと！ なに！」

とっさのことで上手く反応できず、美希は水中に引きずりこまれていく。ようやく下を見て確認すると、リリン二人が美希の足首をつかんでいた。

「ミカ！ どうしましたか！」

ラファエルは上空からミサイルのようにダイブして、リリン達の手首をつかんだ。ラファエルのオーラで手首を焼かれ、リリン達は顔を歪めて手を放す。ラファエルは二人をつかんだまま飛び上がり、島に向かって放り投げた。

「わたしのミカに手出しすると許しません！」

手のひらに槍を発生させると、ラファエルは猛烈な勢いで突進した。

リリン達は二手に分かれて飛び退き、翼も出さずに空を飛んで逃げた。

美希はジェット噴射で水面に立ち、ロケットランチャーで狙いを

定めた。

「ラファエルは右のを追って！ あたしは左！」

「了解です！」

ラファエルが右のリリンに突進すると同時に、美希のロケットランチャーが充填を終えた。

「あたれ〜！」

引き金を引くと、相殺されたわずかな衝撃とともにロケットが飛び出す。そこから一気に加速したロケットは逃げまどうリリンを追尾して放さない。リリンは水中に逃げ込もうと急降下したが、間に合わなかった。ロケットは追いつき、標的を巻きこんで爆発した。

右に逃げたリリンはラファエルの突進を紙一重でかわした。右手に持ったレイピアで猛烈な連続突きを繰り出す。

「この前のリリンより元気ですね」

ラファエルは槍を使って突きを殺し、さばいていたが、

「見切りました！」

と、槍の先端でレイピアの先端を突いて破壊した。

「降参しますか？ あなたにはもう武器がない」

リリンは鼻で笑い、両手にオーラをためた。

「それもまたあなたが選んだ道です。さようなら」

ラファエルはリリンの背中を槍で貫いていた。瞬間移動でもしたかのようにリリンの背後から。リリンはくすぶった自らのオーラに身を焼かれて消え去ったのだった。

島で合流するなり、二人は岩場に寝そべった。つるつとした巨大な岩盤が日光で温められていて、冷えた身体を心地良く温めた。

「あー怖かった。ラファエル、ありがとう」

「天界にまで乗りこんでいるとは、要注意ですね」

ラファエルは美希を転がしてうつぶせにさせると、ビキニのヒモを解く。

「ちょ、ちょっと！ なにするの！」

「大人しくしてください」

ラファエルは美希の腰にまたがり、肩を押さえつける。

「翼を出します。やっぱり、ないと危険です」

「や、やだ！ 痛いもん！ 放してよ！」

じたばた暴れるが、ラファエルは構わず背中を引っかいた。

「痛い痛い！ 死んじゃうよ！」

ミミズ腫れの十字が白い光を放ち、ラファエルはそこに手を突っ込む。

「気持ち悪い！ げーってなる！ 放して！」

美希の暴れる手脚にオーラがこもりだして、ラファエルは手当たり次第に引っ張った。

「あれ、まだなんかあります。これも、これも……」

「はーなーしーてーよー！」

美希は苦痛に歪んでいた顔からカッと目を見開き、瞬間的なオーラ攻撃でラファエルを弾き飛ばしていた。

「いたたた。ミカの翼を出すのは何度やっても恐ろしいですね」

美希はハッと我に返ってうつむいた。

「ごめんね、痛くて怖くて、なんか夢中で」

「あはは、それでも手加減できるようになりましたね。今回は火傷してません」

ラファエルは美希の背後を見て「ほほお」と、目を丸くした。

「どしたの？」

「六翼です。翼が六つ出てます」

美希は振り返って、

「ほんとだ」

と、それぞれの翼を動かしてみる。真っ白な六翼は、日の当たり方によって金色に輝いて見えるような、神々しく立派な翼だった。

「いよいよ神様らしくなってきましたね。育ててきた甲斐があるというものです」

「いつ、あたしがラファエルに育てられたのよ！」

ラファエルはおもむろに美希の胸をつかむ。

「うむ、たしかに育ってません。これなら隠す必要ない。没収です」
ラファエルは、ほどけていたビキニのトップをさらって逃げていく。

「ちょっと待って！ それはほんとに無理！ 返して〜！」

美希は中段の翼で胸を隠しつつ、ラファエルを追いかける。

「早速役に立ってますね」

「うっさい、返せ〜！」

そうやって、日が傾く頃までじゃれ合う二人だった。

メタトロンとガブリエルが買い出しから戻ってきて、美希とラファエルはカレー作りをした。大人の二人は湖に足をひたしてキャンプチェアに座り、ビールでくつろいでいた。

「ラファエル、お芋切らないで入れたの？ あ、ニンジンもタマネギも丸ごと入ってる」

「まな板が見当たらなかったの、丸ごとです。煮えれば柔らかくなるから平気です」

「もう、横着しないの。こっちはいいから、ご飯のほう見てて」

美希はまな板を物質化して具をすくい上げ、カットして入れ直した。

「今日は戦ったから、アマランサスたっぷり入れましょう。あ、大変です、嘔きこぼれてます」

ラファエルはオーラで手を保護しつつ飯ごうを火から下ろし、蓋を開けた。天界アマランサスという、食べればオーラになる穀物をドサツと足して、火にかけ直した。

「こんどは弱火だから大丈夫です」

ラファエルもクーラーボックスから缶ビールを取り出して開けた。

「ミカも飲みますか？ よく冷えてますよ」

「やめとく。ラファエルだって見た目は中学生なんだから、地上に帰ったらやめなさいよ？」

「わかってます。ミカはちびっ子のくせにママみたいです」

「誰がちびっ子ですって？」

ラファエルは顔のパーツをギュッと真ん中に寄せて、憎たらしい顔をした。

「あはは、面白い顔。……あれ、火が消えてない？」

ラファエルは慌てて確認し、火をつけなおした。

「全然沸いてきません。冷めちゃったようです」

ラファエルはバルブをひねって強火にした。

「から酒はおいしくないです。なにかお菓子でも……」

食料の入った段ボールを漁る。見つけたスナック菓子を二袋手に取り、ガブリエル達に一袋渡そうと歩いていく。そして、ラファエルはお喋りに夢中になってしまった。

「あれ、焦げくさい」

美希が気付いたときには、焦げ焦げとベチャベチャが層になった大失敗ご飯が出来上がっていたのだった。美希はやれやれとため息をつきながらも、代わりのご飯炊きに取りかかった。

「ごめんなさい、つつい話し込んでしまいました」

ラファエルが帰ってきたときには、カレーとご飯、サラダまで出来上がっていて、あとは盛りつけるだけだった。

「上手く炊けましたね。わたしだってやれば出来るんです。料理なんて簡単、簡単」

ビールのせい、少しハイテンションなラファエル。美希は真っ黒焦げの飯ごうを指差して示す。

「ラファエルはそっち食べてね。お米もアマランサスも無駄にしちやだめよ」

ラファエルは恐る恐る蓋をはずして、げんなりした顔になった。

「これはひどいです。炭のにおいがします。上のほうはお粥になっています」

「……まあ、ラファエルにご飯任せたのが無謀だったわ。みんなでちよつとずつ分担しよ」

美希が盛りつけを始め、ラファエルが「出来ましたよ」と呼びかける。

完璧に整ったテーブルを見て、ガブリエルは上機嫌そうに言った。

「あら、ミカが全部作ってくれたの？ 上手く出来てるじゃない」

「ラファエルもミカに教えてもらって上手くやったんじゃないですか？ 決めつけてはかわいそうです」

フォローに回ったメタトロンだったが、黒こげの飯ごうを発見し

て笑いだした。

「なるほど、こういうわけでしたか。でも、ラファエルにはラファエルの良さがあります。女の子だから料理が得意でないといけないなんて、古い考え方ですよ」

「そうね。ラファエルは元気と豪快さが売りだし」

ラファエルは口を尖らせてみせる。

「それじゃあまるで、がさつな馬鹿女みたいです」

美希はラファエルの背を押してうながし、座らせた。

「そんなことない。ラファエルは優しいし魅力的な女の子だよ。ほら、冷めちゃうから食べよ？」

味も上出来だった美希の料理とラファエルの失敗ご飯を食べ比べ、からかったり慰めたりで賑やかな食事だった。食事のあとに花火などして遊んだあと、二人ずつにわかれてテントに入ったのだった。

ラファエルはなかなか寝付けずに、テントの外に出た。美希は気持ちよさそうに寝息を立てているが、メタトロンとガブリエルはまだ小声でお喋りしているようだ。

「ちよっとお散歩してきます」

「暗いから気をつけるのよ」

ラファエルは人差し指の先にオーラを点してぶらぶらと歩いた。少し歩くと木製の栈橋があって、その先端に体育座りした。

十字を切ってクマのぬいぐるみを取りだし、膝の上に乗せて向かい合う。

「わたしは役立たずのダメな子です。ヤハウエ爺ちゃんがいた頃は、みんな爺ちゃんがやってくれて、わたし達は無邪気な子どもでした。でも、今はみんな大人みたいです。わたしはちよっと寂しいです」

古ぼけたぬいぐるみの頭を撫で、ギュッと抱き締める。

「わたしは泣きません。熾天使一の勇猛な戦士です。爺ちゃんが認めてくれた最強の戦士として、爺ちゃんの大事なミカを守り抜きます」

噛みしめていた唇がワナワナと震え、ひとしずくの涙がこぼれ落ちた。

「でも、やっぱり、ちょっとだけ羨ましいです。ミカはちっこくて、可愛くて、みんなから愛されて、なんでも器用にこなす天界一の人気者です。わたしもあんな風に大事にされてみたいです。女の子らしくしてたいですよ」

ラファエルは突如、背後に気配を感じて振り向いた。しかし、誰もいない。

「……爺ちゃん？ ……そんなわけないですね」

十字を切ってぬいぐるみを戻し、槍を引きずり出す。

「出てきなさい。またミカを狙いにきましたか？」

確かに感じる殺気。しかし、見回しても姿がない。

ラファエルは指先のオーラを消した。辺りが真っ暗になる。

「そこですね！」

栈橋に槍を突き立てる。すると、栈橋をすり抜けて人影が飛びだしてきた。

闇の中に輝く真っ赤な瞳。紅蓮の炎をまとった二刀流。ピンクの髪に夢魔の翼。

「サツちゃんママ……？」

ラファエルは後ずさりしながら、槍で二刀をさばき続ける。

「エヴァの周りにはいつも護衛がいて、邪魔くさいったらないわ。目障りだから死になさい」

「また『エヴァ』ですか。あなたは一体何者です？」

問答無用で女は仕掛け続ける。栈橋のあとがなくなって、ラファエルは翼を出した。

「答えたくないなら結構です。たとえサツちゃんだとしても、ミカを狙うなら許しません」

ラファエルは槍を風車のように回して防御しつつ、左手にオーラをためて放つ。女はそれを弾こうと一瞬気を取られた。そこを足払いで転ばせ、胸元に槍を突き付ける。

「捕縛」

女を拘束するためにオーラのリングを発生させる。しかし、女は目の前から消えて、栈橋の下からドボンと音がする。

「壁抜け？　なるほど、夢魔術ですか」

女は黒ロリータの衣装から湖水をしたたらせて、再度ラファエルに襲いかかる。

ラファエルは防御しつつ、あることに気付いてハッとした。

「細身の剣による滅多突き。ミカの顔見知り。地上人が天使長を殺すなど誰も考えが及ばない。……おまえがミカを殺したな！」

ラファエルの中で何かが弾けた。爆発音とともにラファエルのオーラが暴走し、天を貫く光の柱になった。ブロンドのツインテールはほどけ、髪が逆立ち、憤怒の表情で女をにらみつける。

あまりの剣幕におののいたのか、女は後ずさりする。栈橋の継ぎ目につまづいて尻もちをついた。

「リリース、お逃げください！」

ラファエルと女の間にはリリンが飛び込んできた。リリンはラファエルの怒り狂ったオーラだけで焼かれ、蒸発してしまった。

「お、おぼえてなさい！」

女は栈橋をすり抜けて水中に逃げた。ラファエルが栈橋ごと槍で貫くと、手応えがあった。ラファエルのオーラによる一瞬の白夜がおさまり、水面には木っ端微塵に砕け散った栈橋の破片と、肩からちぎれた左腕が浮いていた。

「ラファエル、なにがあったの？」

爆発音を聞きつけたのか、ガブリエルが飛んできていた。

ラファエルは猛り狂ったオーラと呼吸をなんとか抑えると、拾った左腕をガブリエルに見せる。

「うわ、きつついわね。この腕の持ち主に襲われたの？」

「はい、サツちゃんママそっくりな女が襲ってきました。あいつが前世のミカを殺した犯人のようです。リリースと呼ばれていました」

ガブリエルは天界警察に連絡を入れ、十字を切って腕を送り届け

た。

「ちょっと大沢家を見てください。ミカから絶対に目を離さないでください」

ラファエルはそう言い残して十字を切り、地上に降りたのだった。

第四章

ラファエルは大沢家の庭で抜き足差し足していた。まだ光希とサツちゃんの寝室には明かりがついている。窓のそばまで近付いたとき、ちょうどよく明かりが消えた。ラファエルはコップを物質化して壁に当てる。

「サツちゃん、こっちおいでよ」

「えー？ 美希ちゃん達が出かけてから毎晩だけど、大丈夫ー？」
「こないならそっち行っちゃうよー」

ゴソゴソと一つのベッドに入る気配があって、会話がどんどん甘ったるくなってゆく。ラファエルは顔を真っ赤にしながら、鼻息を荒くしながら聞き入っていた。

視界の隅で何かが動いたのを察知して、ラファエルは舌打ちした。
「いいところだったのに」

追いかけると、リリンが駆けていくのが見えた。ラファエルは翼を出して飛び、あっという間に追いつくと、オーラのリングで捕縛した。

「さて、邪魔してくれたからには、リリスについて喋ってもらいます」

ラファエルはふいの電撃でリリンを消されぬよう、オーラの防壁をはった。十字を切って注射器を取り出し、リリンの肩に突き付ける。

「これ、できれば使いたくありません。強烈過ぎる自白剤で、天界では本来禁止されている薬物です」

リリンは大して気に止めた様子もなく、涼しい顔をしていた。

「我々リリンは死ぬことも恐れない。個々の命を惜しむという感覚がないのだから。好きにすればいい」

ラファエルは首を振る。

「これで死ぬことはありません。ただし、物凄い苦痛で錯乱し、自

白も思いのままになります。そして、一生元の身体に戻りません。
発狂するほどの苦しみが生涯続きます」

リリンはまるで恐れていないようだ。

「強情な奴です。天界にそんな危ない薬などありません」

ラファエルは注射器を十字の中にしまった。

「うーむ、どうしたらリリスについて喋ってくれますか？ わたしは拷問とか嫌いですよ」

「知りたければ本人に聞けばいい」

リリンは顎を突き出して、ラファエルの背後を示す。振り返ると、左肩を押さえて憎々しげな顔のリリスが立っていた。

「わたしの美しい身体を……腕を返せ！」

リリスは口に咥えていたサーベルを右手に持ち、ラファエルに襲いかかる。ラファエルがかわすとリリンをかすめ、拘束していたリングがとけた。

リリンは曲刀を出してラファエルに斬りかかった。

「言い忘れたが、わたしは名前を持っている。アーリマンという名前をな」

今までのリリンとは明らかに動きが違った。この男には前世の評議員達が次々にやられたのだ。

ラファエルは槍を出し、翼を出して飛び上がった。しかし、すばしっこいリリスに行く手を塞がれ、背後からアーリマンの剛力が迫る。

「アーリマン、その小娘を押さえてちょうだい。わたしにしたのと同じように、いいえ、倍返し、それとも四倍返しがいいかしら？」

「やめて……放してください……」

抵抗虚しくアーリマンに羽交い締められる。

「まずは同じ目に遭わせてやるわ」

リリスは嬉々とした表情で振りかぶり、ラファエルの左腕めがけて振り下ろした。

切断された腕が宙を舞う。

耳をつんざく女の絶叫が深夜の街に木霊する。

「……とうとう見つけたぜ、アーリマン！」

リリスの背後に光希が浮かんでいた。バスローブを羽織ってサンダル履きだが、恐ろしいまでのオーラをまとっている。光希は『リリスの右腕を切り落とした』剣の血をペロリとなめる。

「なるほど、サッチャんの味だが、少し違うな」

光希はリリスに蹴りを入れて地面に叩き落とした。

「光希パパ……目覚めたのですか？」

「美希ちゃんが地上人を解放してくれたおかげで、俺もサッチャんも全て思い出したんだよ。俺は魔王ルシファだ。そして、そこにいるアーリマンに復讐しなくちゃならない」

光希は早速アーリマンに斬りかかる。

「あのサッチャんもどきに用があるんだろ？　ここは任せて行っていくぞ」

ちょうど本物のサッチャんが光希に加勢しにくるのが見える。ラファエルに気付くとウィンクして見せた。二人ともずいぶんと若返って、二十歳ぐらいの見た目になっている。

「じゃあ、こいつは頼みます」

「無理しちゃだめよ？　ラファエルちゃんはこの可愛い姪っ子なんだから」

力と記憶が戻って嘘だとわかっているはずなのに、サッチャんは姪っ子だと言った。ここしばらく親の無い子をやってきたラファエルには少々こたえる一言だった。

「わかってます、叔母様！」

「叔母様はだめよ！　サッチャんと呼んで！」

ラファエルは背後に手を振りながら、リリスを追った。

リリスは靴を脱ぎ、右足で器用にサーベルをつかむと、空間を切って裂け目を作った。

「待ちなさい、リリス！」

ラファエルは夢中で追いかけて、一緒に裂け目に入った。

裂け目を抜けると、そこは色とりどりの花が咲き誇る大河の河原だった。

「ここは……ひょっとして……コキュートスですか？」

一人つぶやくラファエルにかまわず、リリスは夢魔の翼で逃げる。川の上流に向かって飛ぶリリスをラファエルはひたすら追いかけた。――しばらく飛ぶと、チラチラと雪が降ってきた。進むにつれて雪は本降りになり、ブリザードになった。大河は細い川になり、いつしか雪の下に消えていた。

「見失いました……まずいです……わたしはどっちから飛んできましたか？」

オーラのバリアで身体を守りつつも、視界ゼロの吹雪の中では心細い。諦めて引き返そうと、着地して大きく十字を切る。そこに入ろうとして、すり抜けてしまった。

「十字の紋章が使えません。コキュートスだからでしょうか？」

物質化も出来ないため、建物を建てて休むことも出来ない。ラファエルはかまくらを作って入り、吹雪がやむのを待った。待てども待てどもやまず、ラファエルは眠りに落ちていった。

ラファエルは暖かいベッドの中で目を覚ました。豪華なインテリアの、お城のような建物である。壁には暖炉が赤々と燃え、窓の外は相変わらずの猛吹雪だった。

「起きたわね。こっちにいらっしやい」

ショートカットの銀髪で肌が透けるように白く、赤い瞳の女の子だった。中学生ぐらいの風貌である。黒いドレスを引きずって、さっさと部屋を出ていく。

ラファエルが追っていくと、女の子は身長は何倍もあるような大きなドアに入っていった。ドアを入ると、そこは玉座の間だった。女の子はためらいもなく玉座に腰かける。どうやら彼女がこの城の主らしい。

「さて、熾天使ラファエル。いまは神性を持っていないようだけど、どういうつもりで冥府にきたのかしら？」

ラファエルは目に見えない力で強制されて、赤絨毯にひざまずいた。

「あの……わたしはリリースを追って……ここは冥府なのですか？」
女の子はため息をついた。

「知らないで入ってきたの？　ここは冥府。そして、わたしは冥府の女神エレキシュガル」

「お目にかかれて光栄です、女神エレキシュガル。それに、吹雪の中から助けていただいて……」

エレキシュガルはビシツとラファエルを指差した。途端にラファエルは口を聞けなくなる。

「助けてないわよ。おまえがわたしのキャンバスを穢すから排除したまでのこと。一万年の間降り積もった雪に罪人達の血で絵を描くの。それがわたしの唯一の楽しみ。だけどおまえはそのキャンバスを台無しにしてくれた。あと百五十年ほどだったのに」

ラファエルの背中を嫌な汗が流れていった。女神の壮大な楽しみを台無しにしたらしい。どんな神罰がくだるものかと恐ろしくなる。エレキシュガルは見透かしたかのようにクスクス笑う。

「怖がらなくてもいいのよ。取って食べたりしないから。ただ、あなたはここから出られない。次の一万年が過ぎるまで、わたしの話し相手になってもらうわ」

ラファエルは気が遠くなって、身体じゅうから血の気が引いていた。禁固一万年、そんな残酷な罰があつていいものだろうか。

「女神エレキシュガル、それはあまりにも酷な……」

「おまえはわたしが一人で何万年もここにすることをかわいそうだとは思わないの？ おまえにとって一万年が有り得ないなら、わたしにも有り得ない。でも、わたしはここを離れられない。女神だつて退屈するのよ？」

ラファエルは歯を食いしばって女神に言い返す。

「わたしには、まだやるべきことがあります。守りたい人がいるのです。どうか、どうかご容赦を……」

「本当に守るべき人なんているのかしら？ いま、地球がどうなつてるか見せてあげるわ」

ラファエルの脳裏に鮮明な映像が浮かんた。地球を大洪水が襲っていた。魔界、地獄も水責めにされ、天界は海に墜落、水没していた。

「う、嘘です……こんなはず……あなたは嘘をついているのでしょう！」

エレキシュガルは目を閉じ、残念そうに首を振った。

「女神ラマシュトウが、おまえが追ってきたリリスのことね、あの子が創造神エンリルにまたずいぶんとわがままを言ったようなの。エヴァの子ども達をみなごろしにしてほしいって」

「エヴァの子……？」

「そうよ、アダムとエヴァの子ども達。地球に住んでる人間達のことよ」

リリスはアダムの最初の妻だったが、アダムとはケンカばかりだった。そこで創造神エンリルはアダムにエヴァを与えた。アダムとエヴァはとても仲が良く、その子ども達が地球の人類になった。

捨てられたリリスはアダムが惜しくなったが、アダムは振り向いてくれなかった。嫉妬深く、怒りっぽいところが嫌いだと言われた。そこでリリスは自分の性格の悪い部分を切り離した。めでたくリリスはアダムと子をもうけた。その子孫がリリン達である。

「ここでいうリリスって誰のことだかわかるかしら？」

「わたしが追ってきたのがリリスではないのですか？」

「そうね、だけど、あれは半分ではない。もう半分はおまえがよく知っているサッチャンという子よ」

「でも、あのリリスがリリン達に慕われているということは、あちらが本体なのですか？ サッチャンは切り離された悪い面だど？」

「そうね、面白いもので、切り離された悪い面は転生を重ねていい子になっていった。一方で良い面のほうはエヴァへの嫉妬が復活し、つる一方で、いまだに成長できていないの。それで、いつまで経ってもエヴァに意地悪ばかりしているわ」

ラファエルは、美希がエヴァと呼ばれていたことを思い出す。

「エヴァとは天使長ミカエルのことなのですね？ と、すると、アダムとは誰なのですか？」

「魔王ルシファよ。彼は本当はエンリル神の弟神でエンキというの。リリスとエヴァは彼のあばら骨から生まれたのよ」

ラファエルは遠い目をして頭の中を整理する。

「つまり、光希パパとサッチャンママの分身リリスの子がリリンで、光希パパとミカの子が人類。リリスはミカが憎くて意地悪を仕掛けたあげく、エンリル神に大洪水をねだった。と、いうことですか？」

「そういうことね」

ラファエルは両手をついて途方に暮れた。世界の仕組みを知ったところで、地球の人類は滅ぼされてしまったのだ。なにかも手遅れである。

「そんなに気を落とすことないわ。いま死んでいく人々も、やがて転生してやりなおす。おまえの希望があれば聞いてあげなくもないわ。こう見えてもわたしはおまえを気に入ってるのよ」

ラファエルはピントの合わない目をして、エレキシユガルの言葉は耳を素通りしていった。ラファエルは呆けたまま訊ねた。

「もう一つだけ……ここは地球ではないのですか？」

「やだ、神性を持ったときに気付かなかったの？　ここは月の内部に存在する空洞よ。元々月は地球を監視するための巨大な宇宙船なの。いまは惑星ニビルがすぐそばにあるから、ニビルとの中継点にもなっているわ」

「わけがわかりません……わたしが今まで信じてきた世界とは、いったいなんだったのでしょうか」

エレキシユガルは瞬間移動して、ラファエルの背後に立った。おぶさるようにラファエルの首に手を回して嬉しそうにする。

「一万年かけて理解すればいいわ。おまえはわたしのお友達に選ばれたのだから」

女神の無邪気な笑い声ばかりが、凍てつく城に木霊するのだった。

生き残った人々は高い山の山頂で避難生活をしていた。三千メートル級の山でも全滅していて、日本でかろうじて残ったのは富士山だけであった。

光希とサツちゃんはアーリマンをあと一步のところまで追い詰めたが、そこで洪水に遭った。夜中のことだったので、眠っていた者達は助からなかった。どこからともなく襲ってきた大洪水はオーラの力を帯びていて、力を持った者でも溺死してしまうようだ。

美希、メタトロン、ガブリエルの三人も富士山に下りてきた。美希を両親に託すと、天使二人は世界の様子を見に出かけた。

「光希君、サツちゃん、ラファエルがどこに行ったか知らない？うちの様子を見に行くって下りたきり、連絡がつかないの」

光希は「ああ！」と、大声を出した。

「ごたごたしてて忘れてた。ラファエルちゃんは恐らく、コキュートスに行ったぞ」

「まさか、生きた身体で？ そんなことしたら……どうなるのかしら？」

光希は目を伏せる。

「すまない、まさかあのサツちゃんもどきが神性を持った者だとは思わなかったんだ。空間の裂け目を見て初めて気づいた。そのときにはもうラファエルちゃんも飛び込んでいて……」

「そんな……。あたし、コキュートスに行ってくる！」

サツちゃんが美希の手をつかんで引き止める。

「だめよ、一人でなんか行かせないわ」

「でも、ラファエルが危ないのよ！ 神性なしで生きたままコキュートスに入った人なんていないんだから！ なにが起こるかかわからないんだから！」

美希は手を振りほどこうともがいたが、サツちゃんに目をのぞか

れた。サッチャんの目が赤く光ると、美希は膝から崩れて眠りに落ちた。

「……だめだな、携帯は通じない。天界が落ちたんだから当然か。なんとかパパに連絡がつけば……」

光希はルシファの神性をバフォメットに預けてあったのである。

——美希が目を覚ますと、サッチャんに膝枕されていた。昼の敷かれた仮設の小屋で、他にも数家族が休んでいる。

「眠って少しは落ち着いたかしら？」

温かいスープを差し出され、美希はカップを受け取る。

「ラファエルは、あたしを守るために頑張ってくれたの。自分の命よりもあたしの命を優先しちゃうような子なの。後先考えずに突っ走るから、放っておけないのよ」

「そうね、でも、それは美希ちゃんも人のこと言えないんじゃないかしら？ あなたにもしものことがあれば、ラファエルちゃんの苦労が水の泡になるわ」

美希はサッチャんの目を真っ直ぐに見て言った。

「だからといって、放っておけない。もう天界も無くなっちゃったんだし、あたしは一人の女の子として、親友を助けに行きたいの。あたしはもう天使長でもなんでもないのよ」

サッチャんはちよつと困ったように微笑んだ。

「そんなことを言ってるんじゃないのよ。わたしと光希君はね、あなたの親なの。あなたが大事なの。あなたが危険な目に遭うぐらいなら、わたし達が身代わりになると言ってるのよ。どうしても行くなら、わたし達も連れて行ってもらおうわ」

光希が小屋に入ってくる。

「だめだ、やっぱりパパと連絡がつかないや。あの『つえー俺様』に限って死ぬわけないとは思っただけだな」

「そう……仕方ないわね」

光希とサッチャんは見つめ合って、無言でうなずいた。

「やっぱり二人を巻き込めないわ。無理しないから！」

美希は小屋を飛びだし、指先にオーラをためた。その指先で空間を引き裂き、コキュートスへの入り口ができる。

「遅いわよ」

「うんうん、美希ちゃんはおっとりしてるからね」

あっさり追いついてきた両親は、さっさとコキュートスに入ってしまった。

「ちょっと、ほんとに危ないかもしれないんだよ？」

美希はブツブツ言いながらも、両親に続いたのだった。

コキユートスに入ると、美希が先頭になって飛んだ。

「はぐれたら出られなくなるから、絶対にあたしから離れないでね」
三人は編隊飛行で大河を遡って行った。

「これって、いわゆる三途の川なんだよな？」

「うん、日本で言うところの」

「渡るんじゃないくて、遡るものだったのか」

広めの範囲を探索しながらも、一行は川の終点に辿り着いた。

「ここからは川が雪の下で見えないから……ちょっと待ってね……」
美希は十字を切ってきらびやかなティアラを取り出し、装着した。
「どうしたの？ いきなりティアラなんか出して」

サツちゃんは首を傾げる。

「この宝石が冥府に導いてくれるの」

ティアラの真ん中の大粒ルビーがレーザー光線のような赤い光を放つ。

「こっちょ」

光が示す方向に沿って三人は飛び続ける。

「ひどい吹雪だな」

「あれ、二人ともどこ？」

猛烈なブリザードに阻まれ、編隊飛行していてもお互いが見えなくなってきた。

「下りるか」

光希の指示に従って、三人は雪原に着地した。光希は紋章を描いたが、効果がなかった。試しに美希が十字を切ると、問題なく機能した。

「なるほど、神性ってそういうことなのね」

美希はうなずきながら、三人乗りのスノーモービルを物質化した。
「光希君、運転できる？」

「バイクの免許なら持つてるけど、似たようなものかな？」

光希、美希、サッチャんの順でまたがり、美希はティアラを光希にかぶせた。

「光希君、かゝわいいゝ」

光に沿って走っていくと、突然吹雪がやんだ。足跡一つない雪原と雲一つない青い空。雄大すぎる景色に、光希は思わず停車する。

「物凄いいところだねゝ」

美希は腕組みして、何やら考えこむ。

「ねえ、光希君。あたし達、何かとっても大事なことを忘れてなかったっけ？」

「そうだねゝ、冥府に直接行く用事なんて、滅多にあるわけじゃないからねゝ」

光希も一緒に考えこむ。

「ねえ、誰かくるわよ」

サッチャんが指差した上空から、人影が突進してきた。人影は雪煙を巻き上げて三人の目の前に突っ込んだ。

「ラファエル、無事だったのね！　って、なにその格好？」

ラファエルはいつも通り、金髪ツインテールに槍をかまえた姿だったが、メイド服を着ていた。

「おや、ミカでしたか。……ミカ！　助けにきてくれたのですね！」
熱烈に抱き合って喜んでいると、フリルエプロンのポケットで携帯が鳴った。

「はい、ただちに。かしこまりました、女神様」

ラファエルは携帯をしまうと、大慌てで指示を出す。

「スノーモービルを片付けて、地面から離れてください。ここは女神エレキシガルのキャンバスです」

言われたままにする一行。

「では、ついてきてください」

快晴の空を十分ほど飛ぶと、冥府の城が見えてきた。黒い石で出来た小ぶりの城で、ガイド無しでは到底辿り着けないことがわかる。

「わたしはここで遭難して、女神様に救われました。というか、捕まってメイドにされてしまいました」

——ラファエルに事のいきさつを聞きながら飛び、一行は城にいた。

「よくきたわね、天使長ミカエル」

エレキシュガルは玄関で出迎えた。嬉しそうに美希を抱き締め、頬ずりする。

「あ、あの〜」

美希が困っていると、エレキシュガルは残念そうな顔で離れた。

「もう、覚えてないの？ わたし達お友達でしょう？」

美希はウームと考える。このアルビノの女神様とはどこかで会ったような気がする。しかし、あまりにも遠い記憶なのか、上手く思いだせないのだ。

「まあいいわ。わたしにはラファエルという新しいお友達もいることだし」

エレキシュガルは気を取り直したようにラファエルの手を取って、ブンブン振りまわしている。

「ところで、そっちの二人は神性を持っていないわね？ それに、わたしのキャンバスを踏み荒らして、どういうつもりかしら？」

一同、ギクリと縮み上がる。雪原の女神ににらまれて、背筋が凍りつく。

「あ、あの、神性を持ってるかどうかって、そんなに大事なことなんでしょうか？」

美希がおそろおそろ訊ねると、エレキシュガルは楽しそうな笑顔で言った。

「大事に決まってるわ。この施設に何かあったら宇宙の一大事ですもの。だから、侵入者は二度と転生できないように魂ごと消去される決まりなのよ」

「そんな……」

硬直した一同を見て、エレキシユガルは嘔き出した。

「でも、わたしだって鬼じゃないのよ。他ならぬミカエルの仲間ですもの、そんなひどいことはしないわ」

ほっとする三人だったが、ラファエルはふんつと鼻を鳴らす。

「女神エレキシユガル、ここに残るのはわたしだけで十分でしょう？ この三人は帰してあげてください」

「やだ」

エレキシユガルは即答した。

「お友達は大勢いたほうが楽しいじゃない。こうしてのこのこ集まってきたのだって、エンリル神のお導きなのよ、きっと」

光希が頭を抱えてうずくまる。

「エンリル……嫌な名前だな……でも、不思議と懐かしい。……エンリル……兄さん？」

エレキシユガルは、しまったという顔をして光希を見る。

「なによ、この子ってばまさか……神性も持ってないくせに……あれ、持ってるの？」

光希はウンウンうなって思い出そうとする。エレキシユガルは後ずさりを始める。

「なるほど、俺はそんなに偉い神様だったか。神性とかなんとか、超越しちゃってるようだな、本来」

エンキ神の記憶を取り戻した光希は、エレキシユガルにゲンコツを叩いた。

「い、いやだわ、エンキ様だったのね。神性を隠してくるなんて人が悪いわ」

エレキシユガルは頭を押さえて涙目になりながらも、必死に愛想笑いをする。

「と、いうわけで、ラファエルちゃんは返してもらおうからな。しっ

かり留守番しとけよ、エレキシユガル」

かっかっかと偉そうに笑って背を向ける光希、一緒に出ていこうとする一同。

「やだやだやだ！ また一人ぼっちなんて絶対やだ！」

エレキシユガルは女神の威厳などそっちのけで駄々をこねた。ラファエルがちらりと振り返る。その瞬間。

「帰さないもん」

エレキシユガルはラファエルに飛びついて額にキスした。額に怪しげな蝶の紋章が浮かび上がって紫に光り、やがて薄い色のタトゥのようになった。

「おまえ……呪ったのか？」

光希は再度エレキシユガルにゲンコツをはる。

「もうラファエルは永遠にここから出られないもんね！ 残念でした！」

エレキシユガルはそう言い残して城の奥へと走り去った。

ラファエルは額を押さえて呆けている。

「なんてことを……」

光希は壁を殴りつけた。

「呪いって、そんなにひどいことなの？」

美希が心配そうに訊ねる。

「あいつの言ったとおり、ラファエルちゃんは永遠にここから出られない。エレキシユガルを倒せば呪いは解けるだろうが、冥界神を倒したら世界の秩序が根こそぎひっくり返る。死者の魂が解放されれば肉体をめぐっての椅子取りゲームで、世界じゅうが修羅道になってしまうんだ」

ラファエルは美希の両肩に手を置いて、ニッコリ微笑んだ。

「こうなったら仕方ないです。わたしはあのわがまま女神様と暮らします。ご機嫌取りをしたらいつか呪いを解いてくれるかもしれません。ミカは神性を持っているのだから、たまに遊びにきてくださいね」

「やだよ、そんなの。ラファエルを置いていくなんて出来ないよ……」

二人は抱き合って涙を流した。

「さてよ……俺はエンキでリリスとエヴァは俺の嫁、元はと言えば俺の分身……つまり、神だ」

光希は美希とサツちゃんの額に手を当てる。

「かなり古い記憶だから手伝いが必要かもしれないが、思い出してみてくれ」

二人は目を閉じ、光希の手が金色に輝いた。二人は元々エンキ神のあばら骨から作られた一心同体。太古の記憶を目まぐるしく思い出し、二人はリリス、エヴァの記憶を取り戻していった。

「つまり、サツちゃんも美希ちゃんも生まれつき神性を持っていたんだ。それを忘れていただけのことだったのさ」

美希は略式の儀式を開いてラファエルに天界の神性を渡す。エヴァとしての神性があるから、ダブっていたのだ。

光希は何もない空間に手を突っ込んで、エレキシガルを引きずり出した。

「ちよっと！ なにするのよ！」

「まあ、話を聞け。おまえにもわかると思うが、俺達は全員神性を思い出して、天界の神性はラファエルちゃんに渡した。つまり、もはや侵入者として罰せられる立場ではないのだ」

エレキシガルはツンとそっぽ向いている。

「それと、キャンバスを荒らしたことは詫びよう。だが、おまえの趣味は少し悪趣味な上に時間がかかりすぎる。そこでだ……」

光希はパソコンを物質化して立ち上げた。

「俺達の世界には面白い道具があっただな……」

「パソコンぐらい知ってるわ。わたしだって神よ？　ばかにしてるのかしら？」

光希はパソコンを操作して、絵を描くためのソフトを立ち上げた。ついでに、そのソフトのテキストブックを数冊物質化して出した。

「どうせ暇してるなら、これをやってみるといい。便利だし面白いぞ」

「パソコンってなんかオタクっぽいし、描いた絵も味気ないっていうか、大体、覚えるの面倒なのよね……」

光希はさらにもう一冊テキストブックを取り出した。ボーイズラブとイケメンを愛する女子向けに書かれた本であった。半裸の王子やら執事がくんずほぐれつする様子を、ステップ形式で丁寧に解説した、いかにもアレな本だ。

「わたしをなんだと思ってるのかしら？　こんないかがわしい……」
言いながらもページをめくる手が止まらないエレキシユガル。パラパラと一冊通して眺め終わると、早速絵を描き出した。

「なるほど、悪くないわね」

あつという間に一枚描き上げるエレキシユガル。

「素敵……」

「鼻血出そうです……」

サツちゃんとラファエルを虜にする一枚。まさに神のクオリティであった。

「しょうがないな、もう！　……エンキ様、あなたの誠意はわかりました」

エレキシユガルは「ごめんね」とつぶやいて、ラファエルの額を撫で、呪いの紋章を消した。

「せっかく楽しくなると思ったのに……」

寂しそうにうつむくエレキシユガル。

サツちゃんはエレキシユガルの顔をのぞきこんで問う。

「もしよかったら、ここに住まわせてもらえないかしら？　どうせわたし達の家もなくなっちゃったんだし、神性と紋章があればどこに住んでたって同じでしょう？」

「まあ、ここから通いで地球の復旧作業をすれば問題ないな。むしろ、ここはいま、どこよりも安全だろう」

エレキシユガルは思わずといった勢いでサツちゃんに抱きついた。

「ありがとう、リリース！　じゃなくて、サツちゃん大好きよ！」
根は悪い子ではなかったらしい。一同はそれぞれに部屋を割り振
ってもらい、各々に部屋を整えて住み着いたのだった。

第五章

光希は富士山でメタトロン、ガブリエルに会い、作戦会議をして冥府に戻っていた。

「とにかく、あの洪水を止めないことにはどうにもならないそうだ」五人でテーブルを囲み、紅茶を飲みながらの会議であった。

「エンリル様を説得なんて、できるのかしら？」

エレキシュガルはすっかりうち解けて、古くからの友達のようになっていた。

「エンリル……関わりたくないな……だがしかし……」

光希は重苦しいため息をつくばかりだった。

「ところで、エンリル神はどこにいますか？ それに、逃げたリリスはどこへ行ったのでしょうか？」

ラファエルが問うと、エレキシュガルはテーブルの上に立体映像を作り出した。太陽系のミニチュアのようなだが、地球のそばにもう一つ、よく似た惑星があった。

「エンリル様もリリスもこの惑星ニビルにいるわ。三千六百年周期の楕円軌道で太陽の周りを回っている星とかつては考えられていたけど、今ではこの星自体がエンリル様の宇宙船になっているの。地球やこの冥府がある月に接近している間は、コキユートスを通じて行き来できるのよ。具体的に言うと、この城よりさらに雪原を進めば転送装置があるわ」

「わたしは捕まえたくせに、リリスやリリンがうろちよろするのはかまわないのですか？」

ラファエルが不満そうに訊ねる。

「一応、神性を持っているのよね。リリスだけじゃなくて、リリンも集合として神性を持っているの」

「そういえば、リリンって一体、なんなんだ？」

「あれはリリスに忠実なロボットみたいなものね。自我とか個体と

しての意思みたいなものが希薄で、リリスが死ねと言えば死ぬ生き物よ。リリスはリリン達をエンリル様に差し出すことで取り入ったみたいね」

「ってことは、アーリマンが評議員達を襲ったのも、エンリルやリリスのしわざか」

「そうね、エンリル様は地球を植民地化しようとしてたみたいだから」

「植民地？」

「そう、ニビルはいま、幸運の樹を育てるためだけの農場になっているわ。でも、エンリル様はもっと幸運の樹を育てたいらしくて、地球にもたびたび植樹を試みてるの」

「幸運の樹って、人の幸運を吸い取って実をつけるあれか？ 万能の創造神がそんなもの育ててどうするんだ？」

エレキシュガルはニビルのミニチュアに巨人の模型をのせた。続いて、テーブル全体が宇宙のミニチュアになり、あちこちに巨人が発生する。

「エンリル様はわたし達の太陽系のトップで、よその太陽系、よその銀河、よその宇宙にはそれぞれ偉大な神様がいるの。エンリル様は幸運の実を使って、よその神々と取引しているのよ。たとえば、補給なしで永遠にオーラを使い続ける能力とか、惑星を改造して宇宙船のように使う技術とか、神でも欲しがるものはいくらでもあるわ」

光希は腕を組んで考えこむ。

「つまり、エンリルはリリスに頼まれるまでもなく、地球人を滅ぼして、リリン達を住ませたかったのか。リリンは文句も言わず働いて、幸運を奪われ続け、都合が悪くなったら消されるだけのロボットなんだな」

サッチャンが突如テーブルを叩いて立ち上がる。

「ひどいわ！ あの子達はわたしの分身の子どもなのよ？ つまり、わたしの甥や姪みたいなものだわ。そんな酷い扱いばかりするのな

ら、わたしがあの子達のママになってやろうじゃないの！」

光希がげんなりした顔になる。

「そうは言ってもさく、エンリル強いんだよく？ エンリルの利害がからんでるから、リリスを叩いたら間違いなくエンリル出てきちゃうんだよく？」

サツちゃんは光希の襟首を持って、スパーンとビンタをはった。

「あなたの兄さんでしょ？ 根性入れて立ち向かったらどうなの？ リリン達はあなたの子どもなのよ？ 助けてあげようと思わないの？」

サツちゃんに揺さぶられるままの光希。そこに美希が追い打ちをかける。

「これまで何度も生きてきて、光希君の奥さんだったり、妹だったり、娘だったりしたけど、妻として、妹として、娘として、がっかりだわ。光希君がそんな意気地無しだったなんて」

光希は完全に脱力し、呆けた顔になった。いまにも椅子から転げ落ちそうだ。

「これはいいけません。奮起させるどころか、とどめを刺してしまっただようです」

ラファエルは光希にひそひそ話をする。

「（エンリル神を倒せば、あなたが新しい秩序になるのです。サツちゃんも、ミカも、それどころか、世界じゅうの女達があなたを崇拜して、嫁にしてくれ嫁にしてくれと押しかける世界だって作れるのですよ？ 一夫多妻を世界標準にすることだって思いのまま……）」

「なん……だと……？」

光希は天を仰いで雄叫びを上げた。

「なぜ、いままでそれに気がつかなかったんだ！ エンリルがなんだ！ 兄貴だからなんだってんだ！ やってやるぜ！ 俺こそが世界だ！ 法律だ！」

光希はワッハッハと笑いながら城を飛びだし、雪原の奥へと消え

ていった。エレキシユガルを残して、女達も慌ててあとを追ったのだった。

転送装置を抜けると、幸運の樹が規則的に並ぶ平原に出た。エレキシュガルが言ったとおり、農場のための星だった。

「たぶん、あそこだろうな」

平原にぼつんとたたずむ塔があった。細長い三角形を組み合わせたような、未来的なデザインの塔だ。

「リリンがいっぱいいるけど、大丈夫みたいね」

リリン達はあちらこちらで樹の世話をしているようだ。オーバーオールを着て麦わら帽子をかぶり、光希達に気付くと空に向かって手を振ったりする。のどかな光景だった。

「なんだか拍子抜けしちゃいますね。一見すると、彼等が酷い搾取を受ける労働者だなんて、嘘みたいですよ」

「でも、リリスやエンリルにとって都合が悪くなれば、雷の一撃で消されてしまうのよ」

サッチャンはまだ険しい顔を保ったままだった。

——塔までは結構な距離があった。間近で見ると相当に高い塔である。

「さて、ここからが難関ってとこかな？」

光希を先頭にして、注意深い足取りで進む一行。塔の入り口は自動ドアであった。中に入るとヒンヤリと涼しく、外が暑かったのだと気付かされる。

「いらっしやいませ」

自動ドアから真っ直ぐ進んだ先、一階フロアの中には受付カウンターがあった。

「リリス！……じゃないのか？」

カウンターのの中にこやかに会釈している女は、ピンクの髪、赤い瞳だったが、よく見れば顔が違った。それでも、どこことなく面影がある。

「リリースにご用でしょうか？ アポはとられてますか？」

「いいえ、ありません」

柔らかな物腰でおっとりした口調で問われると、光希は飲まれてしまう。とても、「いいから案内しろ」と剣で脅すような真似などできない。

「わたしはリリースの身内なんだけど、会わせてもらえないかしら？」
受付嬢はサッチャんの顔をじっくりと見る。

「ほんと、あなたリリースそっくり……はっ、すみません、あんまり似ていらっしゃるので」

受付嬢は顔を真っ赤にしながら、内線電話の受話器をとった。

——受付嬢に案内されるまま一行はエレベーターに乗り、三十八階で止まる。光希達が降りると、受付嬢はお辞儀をしてドアを閉じ、戻っていった。

「なんだか、凄いところです」

エレベーターから降りたはずなのに、そこはビルの中という感じではなかった。薄暗い空と、ジャリジャリした大粒の砂の荒野だった。どこまでも続く荒野の奥から、またしてもリリースのような女が高速で飛んでくる。

「こちらです」

一行は翼を出して女に続く。

しばらく飛ぶと、女は突然振り返り、何か仕掛けようとした。

「まあ、こんなことだろうと思ったぜ」

光希がゲンコツをはって止めると、ラファエルがオーラのリングで捕縛した。

ラファエルに槍を突き付けられ、女はそのまま先頭を飛ぶ。そこに無数の矢が放たれた。

「おい、仲間とか関係ないのか？」

女はあっという間に矢だらけにされ、落ちていった。一行はそれぞれの武器を手に、矢を落したりさばいたりして進んだ。

横一列になって弓を引き続けるのはリリン達であった。その中心

付近には幾人かの女達が見える。

「うるさいトカゲどもだ！」

光希は剣で増幅させたオーラを左から右へ放ち続け、弓矢部隊を焼き払う。美希は女達をめがけてロケットを発射した。

着弾とともにラファエルが突撃する。ロケットの爆発で吹き飛ばされた女達が、それでもなおラファエルを取り囲む。四肢のいずれかをなくしている者もいたが、氣にとめる様子もない。

「自我が希薄とは、こういうことですか……」

這いつくばってでも攻撃してくる女達をラファエルは気味悪く思った。思いつつも、槍をかまえ、コンパスのようにくるりと舞って、女達に引導を渡した。

「やはり、こけおどしは通用しないわね」

空からリリスが降ってきた。

「腕はもういいようですね」

「おかげでエンリル様に叱られたわ。近頃要求が多すぎるって」
リリスは愉快そうに笑う。これから四対一の戦いになるというのに、ケラケラと笑い続けている。

「ごきげんよう、皆さん。惑星ニビルへようこそ」

全員が揃うのを待って、リリスはスカートをつまみ、会釈をした。

「なんだこいつ、酔っぱらってるのか？」

「酔ってなんかいませんわ、エンキ様。わたしはここであなた達を倒さなくてはなりませんの。それぐらいの役目も果たせないなら、うざいから死ねって言われてしまいましたの。……ラストチャンスですよ」

自業自得とはいえ、エンリルとエンキ、二人の巨神に挟まれてつらい思いをしているのだ。つついしんみりと、同情の眼差しを向けてしまう一同。

「ねえ、それならわたし達と一緒にエンリルを倒しましょうよ」

サツちゃんは自らの分身に微笑みかける。

「……いいの？ わたしはずっとエヴァをいじめてきた意地悪な女

なのに」

美希はため息をつきながらも、

「済んじゃったことだし、気にしなくていいよ」

と、リリスの肩に手を置く。

「なんて優しい人達なの……これが愛というものなのかしら……」

「そうかもしれないわね……」

サツちゃんはリリスを抱き締めた。リリスも抱き返して、再会の涙を流す。

「……立派に育ったわね。……これでわたしは完全になれる。……あなたがお人好しで助かったわ」

サツちゃんの身体が光を放ち、煙のようになってリリースに吸収されていく。

「てめえ、なにしやる！」

光希が殴りかかったが、リリースは夢魔の翼を広げてはね返した。サツちゃんも応えるように翼を広げ、二人の翼が卵の殻のように二人を包む。

「堅いです、いったいどうなってるんですか！」

ラファエルは槍でこじ開けようとするが、びくともしない。光希もリリース側の翼を剣で斬りつけるが、通用しない。いよいよ美希がランチャーをかまえたところで、サツちゃんの翼が煙になった。そして、全て吸われてしまった。

「夜と魔の女神ラマシュトゥ、ここに復活」

まがまがしいほどの強大なオーラを漂わせ、ラマシュトゥは翼を広げる。そのまま天に向かって人差し指を立てると、薄暗かった空が星空に変わる。

「わたしの夜へようこそ。二度と明けない真夜中を一緒に楽しみましょう」

ラマシュトゥの目が赤く光る。美希とラファエルはその場に崩れて眠ってしまった。

「格が違うか……」

リリース、サツちゃんの二人にわかれて鍛えてきた力が合わさり、相当に力をつけているようだ。

「さすがはエンキ様、あなたは眠ってはくれないのですね。でも、夜がわたしに味方する。今ならあなたにだって勝てますわ」

ラマシュトゥが二刀をかざすと、そこに無数の星くずが降ってくる。星を集めた二刀は赤く輝く光の剣になった。触れれば蒸発間違いないの二刀が、光希に容赦なく襲いかかる。

「さあ、踊りましょう。殺したいほどあなたが好きよ」

ラマシュトウはエロティックなほどに嬉々とした表情で、一ミリの隙もない剣舞を踊る。

「おまえを殺したらサツちゃんはとうなる？」

「わたしとあの子は一心同体。もちろん、あの子も死ぬわ。殺せない？ わたしを愛しているから殺せないの？」

からかって笑うラマシュトウ。光希は防戦を強いられる。

「ちくしょう、これじゃあいつかとまるで同じじゃないか」

「いいえ、あのときとは違うわ。あなたに逃げ場はないもの」

前世で光希がサツちゃんを殺した記憶。ラマシュトウはサツちゃんと記憶を共有しているようだ。

突如、美希とラファエルが悲鳴を上げる。

「死ぬほど怖い夢を見たら、とうなると思う？」

「知るか。……って、まさか、おまえ！」

お互いの剣が火花を散らす中、ラマシュトウはケラケラ笑う。

「あの子達、もうすぐ死ぬわ。それが嫌なら戦いなさい。わたし、うずうずしてるの。本気の殺し合いがしたくて、おかしくなりそう」

光希は前世での悲劇を思い出し、攻撃できない。しかし、この特殊な夜の空間で、どこに向かえばラマシュトウから逃げられるか見当もつかない。しかも、逃げれば美希とラファエルが殺されてしまうのだ。

「ねえ、夜の女神がこれだけ誘っても興奮しないの？ あなた不能なの？ わたしに恥をかかせるなら殺すわよ？」

凄みをきかせたラマシュトウの目がビカビカと点滅する。光希は目を閉じて防ごうとしたが、まぶたの中まで視線が突き刺さり、光希の身体は硬直する。

「大したことない男ね。これがあのおっかないエンリル様の弟だなんて、信じられないわ」

美希が眠ったまま悶え苦しみ、光希の名を呼ぶ。

「それじゃあ、三人とも楽にしてあげましょうね。かたわれがお世

話になったようだし、手短に済ませてあげるわ」

光希は雄叫びを上げると、身体の自由を取り戻した。

「あら、やる気になったの？」

ラマシュトウはかまえなおしたが、光希は剣を捨てた。

「なによ？ 丸腰だからって容赦しないわよ？」

「いいこと思いついたのさ」

光希は紋章を描くと、木刀を取り出した。

「なんの真似よ？」

「おまえごとき、これで十分ってことさ」

ラマシュトウのこめかみがピクピク震える。

「なめるな！」

二刀が切り裂いた剣圧だけで木刀は粉々になった。

「隙あり」

怒りにまかせた一撃は多少大振りになった。光希はラマシュトウに背後から抱きついていた。

「ちょ、ちよっと……何考えてるのよ……」

ラマシュトウは顔を赤らめてモジモジする。

「俺が悪かったよ。君は最初からパーフェクトな女の子だったんだ。エヴァなんかよりずっと好きだよ。だから、もうそんな怖い顔しちゃうだめだ」

「う、うそよ……あなたはエヴァみたいな無邪気で純情な女の子が好きなんだわ」

光希はかまわず、唇を耳にくっつけるほど寄せて、低い声で囁く。

「大好きだよ、ラマシュトウ。愛してる」

ラマシュトウはフニャフニャになって二刀を落とし、地面にへたり込んだ。光希はへばりついて離れず、齒の浮くようなセリフを連発した。

「……光希君。……サツちゃんが好きなのはわかるけど、エヴァより愛してるっていうのは余計じゃないかな？」

背後で強大なオーラを燃やす美希がいた。睡眠の魔法が解けたよ

うだ。

「み、美希ちゃん……起きたの？ いや、もちろん君も大好きだよ。だけど、今回は親子なわけだし……」

「光希君が秩序になったら、あたしと結婚できるようにルールを変えてくれると期待してたのに……ひどい……」

光希は美希に手招きして、ヒソヒソ話をした。

「あ、そっか」

ラマシュトウは光希を心配そうな目で見る。

「やっぱりエヴァがいいんでしょう？ 愛していないなら優しくしないでよ……」

まるで悪いホストにはまる貢ぎ女のように頼りなくなったラマシュトウ。光希は髪を撫で、甘く口付けたりしながら、ふやけた言葉を紡いでいる。美希とラファエルは「やってられない」と、辺りを偵察に行った。

「俺はずっとサツちゃんを愛してきたけど、何か足りないと思っていたんだ。ラマシュトウ、君が完全な君になったように、俺の愛もいま完全なものになったんだよ」

ラマシュトウは茹で上がった顔をして、光希の腕に『の』の字を書く。

「君と言う名の宝石を銀河の星々の中に落としてしまった。その絶望がわかるかい？ でも、君はどんな星よりも光り輝いて、俺に示してくれた。『わたしはここにいますよ』って。君は幾億の星々の中から探し出した俺だけの宝物さ。だから君をもう永遠に放したりしないよ」

ラマシュトウは突如、足をジタバタさせて笑いだした。

「あなた、どこでそんな恥ずかしいセリフ覚えたの？ ひょっとして自作？ 即興でそんなこと言うほどロマンチックな人だったのかしら？」

こんどは光希が顔を赤くする番だった。ラマシュトウの表情がいつのまにかサツちゃんのそれに変わっていたのに今さら気付く。

「べ、べつに、サツちゃんにだって同じことを言えるさ。嘘を言ったつもりはないよ」

「そ、そう……」

サツちゃんはまんざらでもない顔をする。

光希が集合をかけて二人が戻ってくる。サツちゃんは三人に状況を語った。

「心の整理がついたわ。リリスとは無事に和解した。サキュバスとリリスの心が混じり合って一つになったけど、今まで通りサツちゃんと呼んでね」

サツちゃんが天を指差して夜の魔法を消すと、エレベーターが見えた。四人はエレベーターに乗って、さらに上の階を目指したのだった。

「どこに行く気だ？ マヌケども」

エレベーターが急停止する。操作盤と明かりの電源が落ち、次の瞬間、ブチブチブチっと音がしてエレベーターは落下を始める。

「どこだ、エンリル！」

光希が叫ぶと、操作盤が生き返った。デジタルの階数表示がどんどん小さくなり、一桁になる。一同は翼を出して、着地に備えた。表示はB1、B2と進んでいったが、しまいにはマイナスのついた数字が狂ったように増えていった。

「この星も地底がミソってやつか」

光希はエレベーターの底を焼き払う。一同、地底に向かって加速をつけた。

つきあたりの地面が見えて、光希は光弾を放つ。ラファエルも加勢して、床が大爆発を起こす。

「あ、壊さなくてもよかったのか」

近付いてみると、普通にエレベーターが止まるような出入り口があった。外側扉にあたる部分が派手に壊れ、吹き飛んでいる。

「まあ、結果オーライじゃない？」

地底フロアを進んでいくと、銀行の金庫室かというほどの分厚い扉があった。一行を招き入れるように開け放たれている。

中にはいると、そこはまるでSF映画に出てくる宇宙船のブリッジのようだった。グルリと取り囲む巨大スクリーンと、いくつも並ぶコントロールパネル。部屋の中央で一段高いところにあるシートに、『艦長』が座っていた。

「泣き虫エンキが何しにきたんだ？ 当ててやろうか？ 『僕のオモチャを壊さないでよ』って、泣きつきにきたんだろ？ 嫌だね、やめてやらないよ。僕はおまえの泣き顔が愉快でたまらないんだから」

エンリルは長い黒髪を気怠そうにかき上げ、物憂げなため息をつく。

「すごいイケメン……」

美希が思わず呟いた。

「エヴァ、よくきたね。ラマシユトウも完全体になって少し落ち着きが出たかな。そっちの可愛い子は、熾天使ラファエルか。三人とも坊やのエンキなんかにはもったいないな。まとめて僕の妻にならないか？」

エンリルがウィンクすると、女達はポーツと夢心地の顔をして、フラフラ歩き出す。

光希は剣を出してエンリルめがけて一撃を放った。光弾はコントロールパネルに着弾し、その衝撃で女達は正気に戻る。

「やれやれ、ここで暴れてもらっては困るよ？ 坊や」

エンリルがパネルを操作すると、リリスと戦った時のような荒野が出現する。違うのは、空が真っ青な快晴だということだ。さんざん地中に潜ったのに青空というのはおかしいものだが、巨神の力はそれだけでたらめなものらしい。

「地球の洪水を止めて、地球の生命も文化も元通りにしてほしいっていうのが、君達の望みらしいね。だが、それは出来ない相談だよ。人類ってやつはエゴが発達し過ぎていてね、どれだけ矯正しようとしても、いつも仲違いしているだろ。だから彼等は徹底的に滅ぼして、リリンに生まれ変わったほうがいいんだ。そのほうが苦しまずに済むというものだよ」

ラファエルは恐る恐るといったように言い返す。

「でも、人々がそれぞれに違った個性を持ち、衝突や葛藤を乗り越えた結果、幸福なことが起こったり、優れた文化が生まれたりもするはずですよ。万能のあなたが徹底管理するだけの世界なら、あなたの想像を超えるものは一切生み出されない。それは退屈ではないのですか？」

エンリルは困ったような笑顔で胸元のペンダントを持ち上げて見

せた。アメジストのような紫の石を六角柱に削ったものだ。

「この僕でもね、幸運を完全に操ることはできない。だからこうやって幸運の実を結晶化して、肌身離さず持っているんだ。つまり、僕が管理する世界でもイレギュラーは起こる。退屈なんてしないんだよ。だが、人類というやつは面白すぎる。面白すぎて害悪なんだ。調子に乗って神々に挑むほどにね」

ラファエルが引き下がると、美希が言う。

「地球の人々は光希君とあたしの子なんですけど。お兄さんだからって、うちの子達を好き勝手に殺したりリリンに変えたりされては困ります」

エンリルはウンウンとうなずく。

「確かに、人類は君とエンキの子だ。しかし、君とエンキがこのとおりしつかりしていないんだから、この兄がかわりに管理してやるしかないんだよ。それから、『うちの子』というのはエゴ丸出しの発言だ。地球で長いこと過ごしてきた君達には当然の思想なのかもしれないが、エゴというやつは結局争いしか生み出さないんだ。長い目で見れば、自由意思というやつは弊害のほうが悪く大きいものなんだよ」

美希がグツと詰まったところで、サッチャンがバトンタッチする。

「それでも、わたしのリリン達は……子を失った悲しみがあなたにはわからないんですか！ 万能の神というのは感情を持たない人ではないの事をいうのかしら！」

エンリルは突然険しい表情になり、金色のオーラをたぎらせる。

見渡す限りの大地が砕け、空に向かって遡っていく。

「あんまり聞きわけがないと、僕だって怒るよ？」

エンリルににらまれて、サッチャンはにらみ返す。女神になったサッチャンのオーラもかなりのものだったが、徐々に押されだした。

「僕を怒らせると怖いよ？ 覚えてるだろう？ リリス」

サッチャンは急にヒイッと青ざめて光希の後に隠れた。リリスが過去に受けた恐ろしいお仕置きの記憶を引き出されたのだ。

「サッチャン脅かしてんじゃねえよ、このオカマ野郎！ てめえが折れないなら力づくでへし折ってやるだけのことだ！」

光希が剣をかまえる。

「おやおや、強く出たものだね。お兄ちゃんにそういう口を聞いて、どれだけ泣かされたか覚えていないのかい？」

光希の脳裏に直接働きかけるような凝視。光希は下唇を噛んで、今にも泣き出しそう。

「な……泣かないもん……僕、泣かないもん！」

光希はカッと目を見開き、エンリルに斬りかかった。

「へえ、我慢できるようになったんだ。偉いな」

エンリルは身軽にかわしながら、光希の頭を撫でる。

「兄さん……？ 兄さんがほめてくれた……」

光希はエンリルの胸にすがって泣きだした。

「きめえんだよ！ どっちがオカマだ、この泣き虫野郎！」

エンリルは光希の腹に膝蹴りを入れ、くの字に折れ曲がったところを肘で突く。光希は地面に叩きつけられた。エンリルは空中で腹を抱えて笑っている。

駆け寄った三人に光希はばつの悪そうな顔をする。女達がかまわず光希を抱き締める。

「いいのよ、あなたは優しい子なんだから」

「本当は強い子だから優しいのです」

「そうだよ、あんな意地悪なお兄ちゃんの言うことなんか聞くことないよ」

サッチャンのハンカチで鼻をかませてもらった光希は再び立ち上がる。

「ちくしょう！ 俺は泣いたら強いぞ！ 覚悟しろ、エンリル！」

光希がかまえると、女達もそれぞれの武器を取り出した。

「その愚かさが気に入らないと言っているのだ！ 身の程を知れ！」

エンリルが右手をかざすと、不快な超低音が大音量で鳴り響く。

四人は耳を押さえ、たまらずにうずくまった。大地を突き上げる巨

大地震と、肉体を焦がす灼熱の陽炎。四人は為すすべも無く翻弄される。

「……なんて……力だ」

光希が、サツちゃんが、美希が、地割れから噴き出したマグマの舌に飲まれて消え去った。車に轢かれた子猫のようにあっけなく、悲鳴すら上げられぬまま。ラファエルはそれを見て発狂する。髪を逆立て目の色を失ってオーラの柱になり、闇雲にエンリルに突っ込んでいく。

「返して！ わたしの仲間を返して！ わたしの家族を返してよ！」
暴走する熾天使の力をもってしても、エンリルには一撃も届かない。

「それがエゴだ。苦しいのだろう。今すぐ楽にしてやろう」
エンリルが手刀を振りあげると、その右腕が光の剣になる。

「次はリリンにでも生まれてこい」

エンリルが手刀を振り下ろす。

「……なんだおまえは？」

リリンが一人、間に入り、曲刀で手刀を止めていた。

「あなたは、アーリマン？ 何をしていますか？」

アーリマンはクックックと喉を鳴らして笑う。

「おまえ達ならエンリルを消耗させるかもしれないと期待したが、やはり無理だったようだな」

アーリマンはそのままエンリルに斬りかかった。

エンリルは手刀を使って受け流す。

「へえ、おまえ、ただのリリンではないな？」

「そのとおり、わたしはリリスと……エンリル、おまえの子だ！」
ラファエルの目の前で繰り広げられる激しすぎる戦闘。加勢しようにも全く入りこむ余地が無い。

「退け（ひけ）、熾天使ごときが立ち向かえる相手ではない！」
アーリマンに怒鳴られて、ラファエルはよろよろと飛んだ。

「ミカ……サツちゃんママ……光希パパ……こんなのってあんまり

ですよ……」

ラファエルは槍を放り投げ、両手で顔を覆って泣きながら敗走した。

エレベーターまでくると、ラファエルは背後に気配を感じて振り返る。

「忘れ物だよ」

半透明の姿になった美希がラファエルの槍を差し出していた。光希とサツちゃんもいる。

「これは、どういうことですか？ 死んだ人の靈魂は自動的に冥府に帰るはずですよ」

光希はなにやら得意気に胸を張った。

「俺達は生まれつきの、生粋の神様だぜ？ 肉体を脱いだぶん、神としてより純粋になったんだ」

光希が美希とサツちゃんに目配せすると、二人はうなずく。

「合体だ！」

三人の靈魂が合わさり、男性とも女性ともつかぬ美しい姿になった。

「これがエンキの完全体だ」

「……何を言ってるのかよくわかりませんが……とにかく、みんな生きていますね？」

ラファエルはエンキに抱きつこうとして、スカッと通り抜けてしまった。

「ラファエルちゃん、それが問題なんだよ。エンリルは肉体を持っただけで純粋な神として存在する技術をどこから仕入れたらしいが、俺は持ってない。本来、神というのは概念であって、力の純度を上げれば上げるほど肉体と矛盾するものだからな。つまり、このままでは奴に触れることもできないんだ」

エンキの声が光希の声から美希の声に変わる。

「ラファエル、あなたの身体を貸してもらえないかな？ あなたに憑依することで、エンキの力をエンリルにぶつけることができるの」

「……もちろん、OKですよ」

ラファエルはニッコリ微笑んで身体を開く。

「よし、スーパー合体だ!」

光希が言っていると、サツちゃんが「合体、合体って、なんかやらし」と笑う。そして、ラファエルは一瞬気を失い、また目を開いた。

「パイロットはわたしですか?」

ラファエルの心の中に美希の声がする。

「ラファエルは天界一の勇猛な戦士でしょ? さっきの見たよ。凄かった。わたし達はあなたの力になるから、思う存分戦ってちょうだい」

ラファエルは槍をかまえると、矢のように飛んでエンリルを目指した。そのスピードは音速の壁を突き破り、ソニックブームを巻き起こす。

「エンリル神、覚悟!」

ラファエルの突撃に対して、エンリルは緑色の物体を盾にした。ずたばろにされたアーリマンであった。ラファエルは寸前のところで動きを止める。エンリルはアーリマンを投げ捨てた。

「……汚い奴です。こんな奴がわたし達の神だとは、恥ずかしくて涙が出てきます」

ラファエルは両拳を握り、絶叫してオーラを高めていった。三度目にして、限界を超えた力を操れるようになっていた。背中には美希の六翼が現れ、槍にはサツちゃんの炎がまとわりついている。無尽蔵な金色のオーラは光希のものだ。

「ほほう、これは凄い力だ。泣き虫エンキもママ達に抱っこしてもらえば強気になれるってわけか」

「だまらっしゃい! わたしは気付きましたよ。あなたは弟の悪口ばかり言っていますが、それはあなた自身の弱さや願望の投影です。エゴを毛嫌いしたようなことを言うのも、あなたがエゴの塊だからなのです!」

エンリルの顔から笑みが消える。

「それは聞き捨てならんな。創造神を侮辱した罪、魂を百度滅しても赦しはしない！」

雷がラファエルを直撃する。悶え苦しみ、悲鳴を上げるラファエルだったが、しまいにはクスクス笑いだし、大声で笑うようになった。

「これがエンキ神の力。エンリル、あなたにも負ける気がしない！」
何度目かの落雷を槍に受け、炎と電気を帯びた槍にして連続突きを見舞う。エンリルは左腕に盾を発生させて防戦した。

「面白い、こうなれば本気でいこう」

エンリルは右手に蛇のように長い鞭を発生させた。巻いてあった鞭をダランと下ろすと、鞭が金色の炎で燃えさかる。

「お仕置きだ！」

生き物のように動く鞭はとらえどころがなく、槍を巻き取られ、遠くに捨てられた。そして、丸腰のラファエルは百叩きの刑さながらに叩かれ続ける。ラファエルの白い肌に無数の切り傷がつく。エンリルは嬉々とした表情で鞭を振るい続ける。

「痛いか？ 泣け、わめけ、絶望して僕にひれ伏すがいい！」

オーラの防壁を張っても効き目がなかった。光弾をためようにも痛みで力が拡散してしまう。

「困りました……力負けはしていないはずなのに……」

心の中で光希の声がする。

「こうなったら、美希ちゃんに替わるんだ。美希ちゃんは元々光弾が得意だ」

「でも、ミカは切り傷の痛みを異常に怖がります」

「それでいいんだ。むしろ、暴走した美希ちゃんは無敵だ」

ラファエルが意識をフツと遠のかせると、美希が主導権を握った。

「ちょっと、痛い痛い痛い！ やめてってば！」

絶え間ない鞭打ちに右往左往して痛がるばかりの美希だったが、しまいに目がすわってくる。

「やめてっていつてるでしょ！ 馬鹿！ 死んじゃえ！」

美希の両手に光弾が現れ、次々に投げつける。バレーボールほどの光弾が二門の機関銃のような勢いでエンリルを襲う。

「むむっ！」

エンリルは鞭でさばききれなくなってきたのか、徐々に光弾が直撃するようになった。

「ええい、わずらわしい！」

盾に隠れてやり過ごそうとするエンリルだったが、

「切れてる……いっぱい血が出てるよ……いたいよおおおお！」

身体じゅうの切り傷に気付いた美希は狂ったように大きな光弾を作り、エンリルに放った。

「おい、ちよつと待て！ そんな馬鹿な！」

直径数十メートルはあろうかという光弾を次々に投げつける美希。流星群がエンリルめがけて降っているような、でたらめな攻撃だった。エンリルが盾ごとどこかへ吹き飛ばされても、美希は止まらない。

「美希ちゃん、落ち着きなさい！」

サッチャちゃんがコントロールを取り、呼吸を落ち着かせる。両手に二刀を発生させ、周囲の気配をうかがう。

「そこ！」

サッチャんの鋭い突きがエンリルの左腕をかすめた。

「やったな？ この僕に傷を付けて、ただで済むと思うなよ！」

エンリルは鞭を投げ捨て、両手を光剣にして斬り返す。サッチャんの二刀は炎を帯びて、エンリルの手刀を焼く。

「あちちっ……いちいち熱いんだよ、この馬鹿女！」

エンリルが怒鳴るとサッチャんの動きがピタリと止まった。

「亭主のしつけが悪いからこういうたちの悪い女が……」

ラファエルの身体はガクンとうなだれたかと思うと、目を見開いて恐ろしい形相になった。空には黒雲が垂れ込め、地面は粉々になって舞い上がる。虚無と化した空間で光希が大剣をかまえる。

「誰の悪口言っちゃってんだ、てめえ！ いっぺん消滅してみるか、

この野郎！」

身長よりも長い剣を目にも止まらぬスピードで操る光希。エンリルは手刀を交差させて受け止めたが、ジリジリと押されて光剣から血が噴き出す。エンリルはとっさに盾を出したが、光希は盾ごと叩き斬った。

「手が！ 僕の手が！」

エンリルの両手は手首から切り落とされ、落下していった。

「エンキのくせに！ 泣き虫エンキのくせに僕の手を！ 許さんぞ！」

エンリルは身体のまわりに莫大なオーラを発生させる。エンリル自身が巨大な光弾のようになっていく。

「まさか、自爆する気か！」

逃れようとした光希は肩をつかまれて動けなかった。切り落としたエンリルの両手が、いつの間にか背後から回り込んでいたのだ。

「さあ勝負だ。ありったけのオーラを燃やしてぶつかり合い、生き残ったほうを勝ちとしよう。泣き虫エンキが頑張ったところで、このエンリルにかなうものではないと、証明してやる！」

エンリルの手は怪力で、他に方法は無さそうだった。

「いいだろう、いつまでも弱虫の弟だと思ったら大間違いだ！」

二人の巨神はありったけのオーラを燃やし、爆発させる。

「リリースに、我等の母に力を……」

どこからともなくアーマリマンの声がしたかと思うと、ラファエルの身体めがけてオーラが降り積もってくる。

「これは、リリン達のオーラ。力を貸してくれるのね！」

サツちゃんの笑顔に応えるように、ニビルじゅうからオーラが集まってくる。

「あたしのランチャー使って！」

美希のランチャーが手の中に現れ、光希は肩にかついだ。集まってくるオーラが増幅、圧縮され、ロケット弾に変換される。

「とどめだ、馬鹿兄貴！」

「思い知れ、泣き虫！」

お互いの渾身の一撃。突進してくるエンリルに、ロケット弾が至近距離で炸裂する。その熱量たるや、^{スーパーノヴァ}超新星にも匹敵するほどだった。眩しい白の闇に包まれたあと、漆黒の虚無が辺りを支配する。肩で息をして、それでも存在していたのはラファエルの身体だった。発射と同時にサッチちゃんの意味が持ち前の素早さを活かして飛び退いていたのだ。

「やったぜ……ついに兄さんをやっつけたぞ……」

ようやく吐き出した勝利の言葉をかき消すように、虚無の空間そのものが語りかけてくる。

「僕を倒したところで、僕だって転生するんだ。そのたびに僕を妨害するつもりかい？」

エンリルは穏やかな口調で問うた。光希が答えに困っていると、サッチちゃんが出てきて言う。

「あなたが生まれ変わったら、きっとあなたを探し出して、わたしがママになってあげるわ。あなたの寂しさはわかった。次こそはあなたをいい子に育ててあげる。だから、安心して今はおやすみなさい」

「それはいいな……僕はエンキが羨ましかったんだ……弱虫エンキが泣くたびに、みんなエンキに注目した。エンキを愛した。僕は強い子だから、一人で育ち、一人で世界を支配した。みんな僕の物だと主張しなければ、エンキに取られると思ったんだ」

サッチちゃんはウンウンとうなずいて、エンリルの言い分を聞き続けた。

「エンキ、ごめんな。しばらくの間、世界を頼むぞ」

「ああ、兄さん。どうせなら次は、可愛い女の子にでもなったらどうだ？ 強い男の娘か妹にでもなるといい。愛されるぞ」

「考えておこう……さらばだ」

それきり、エンリルの気配が途絶えた。

「さて、ここからどうやって帰ろうか？」

全くの虚無空間に一つの身体で取り残されてしまった。途方に暮れる四人の思考だったが、人の気配が近付いてくるのを感じて身構える。

「攻撃しないで、わたしよ」

大鎌の先に光を点して現れたのはタナトスだった。

「ここはかなり危うい領域。早く出たほうがいい」

タナトスが空間を切り裂いて入っていく。ラファエルの身体もあとに続いた。着いたところは冥府の城だった。

エピローグ

冥府の城に着くと、ラファエルは玉座の間に通された。玉座にはタナトスが座り、エレキシユガルは脇に立っている。

「イシユタル、光希達の身体を復元するから準備を」

イシユタルと呼ばれたエレキシユガルは「はい、姉様」と答えて、慌ただしく準備に走った。

「あの子はわたしの妹で、イシユタル。わたしが本物のエレキシユガル。冥界の女神」

よく見れば、二人はそっくりな顔立ちだった。妹のイシユタルが冥界神の地位と仕事を羨んだので、姉のエレキシユガルは名前ごと立場を貸していたそうだ。

「姉様、準備ができました」

タナトスは立ち上がり、復活の儀式を執り行った。

「それぞれの名前を書いた紙人形を並べ、コキュートスの水を吹きつけ、命の灰をふりかける」

紙人形はみるみる大きくなり、ボンッと白煙を上げて肉体になった。

「意外に簡単なことなのですわ」

作業中のタナトスに代わってイシユタルが答える。

「そうね、これをやっている相手かどうか選ぶのも冥界神の仕事の一つなの。作業自体は難しくないわ」

三人の肉体が出来上がり、仰向けに横たえてタナトスが言う。

「キスしてあげて。キスしてる間に乗り移れば元に戻る」

ラファエルがそれぞれの唇にキスすると、美希とサツちゃんが復活した。

「光希パパにもチューしますか？ サツちゃんママ怒りませんか？」

「しょうがないから今回だけ許すわ」

ラファエルは神妙にうなずき、光希に口付けた。

「……あれ、まだですか？」

何度キスし直しても光希が動かない。

「まさか、魂がラファエルの心に溶けちゃったとか？」

美希が心配そうに言うが、サツちゃんは首を振った。サツちゃんは魔法術で鳩の幻影を作り出し、光希の身体に豆をまく。

「待ってくれ！ それだけは勘弁して！」

光希は飛び起きて豆を払い、美希の後に隠れた。

「ラファエルちゃんとのキスがそんなに名残惜しかったのかしら？」

サツちゃんが「行け」と号令をかけると、鳩たちは光希に向かって飛び立った。

「やめっ……やめて〜！」

——サツちゃんと光希の小競り合いが終わると、タナトスが空間を切り裂く。

「イシュタル、頼んだわよ」

地球の地上に戻ろうとする一行。イシュタルはタナトスの袖をつまんで泣きべそをかいた。

「お姉ちゃん、もう行っちゃうの……？」

「わたしは魔界を復興して、バフォメットといいことをする。あなたが言いだして受けた仕事なのだから、しっかりやり遂げなさい」

イシュタルはどうとう、うえ〜んと泣きだしてしまい、タナトスの腰にすがりついて離れない。

「困った子。……そうだ、あなたにお土産がある」

タナトスは、まだ片付けていなかった肉体復活セットに向かう。

ギルガメシュと書いた紙人形を肉体化し、自ら口付けて魂を吹き込んだ。

「こ、ここは……どこだ？ あ、あんたはあのときの！ こっち来るな、死神女！」

復活したギルガメシュとは、亮輔だった。美希のストーカーをしていた男子生徒である。

「洪水で死んでさまよっていたところをさらっておいた。イシュタ

ルの大好物」

イシュタルは亮輔に抱きついて、テンションマックスになっていた。

「ギルガメシュ！ またこうして会えるなんて、イシュタル嬉しくて嬉しくて変になっちゃいますわ〜」

アルビノの美少女に抱きつかれ、まんざらでも無さそうな亮輔だった。

「ギルガメシュ、うちの変態妹を頼む。おまえの変態趣味を思う存分ぶつけても、その子は喜ぶはず。二人で永遠を楽しむといい」

「頑張ってね」

美希がウインクして去ると亮輔は名残惜しそうにしたが、イシュタルに押し倒されて、すぐにどうでもよくなった。来る日も来る日も何万年も二人は飽きることなく、ラブラブな日々を過ごしたまじたとき。

エンリルの洪水がおさまってからというものの、労働力の多い地上はみるみるうちに復興していった。魔界は元々物質化で栄えた文化だから、復興もお手の物だった。天界と地獄の住人は復興を諦め、地上や魔界に移住した。

地上に残った人口と移民で平等に土地を分け、天界アマランサスの栽培が盛んに行われていた。天界アマランサスの栽培は難しくなく、大人も子どもも自分に割り当てられた土地を管理して、いつでも十分な量を確保できた。

魔界同様、働きたい者が働き、学びたい者はいつまでも学生や研究者でいられる社会になった。もちろん、自分のアマランサスさえ管理していれば、遊び人をやっていたってかまわない。中にはアマランサスの管理さえしない怠け者もいたが、彼等はオーラを使うこともないので問題無かった。生きるための最低条件として労働があった時代と比べ、人々は寛容になり、悪事を働く者も格段に減った。美希とラファエルは中学三年生になっていた。とはいえ、受験戦

争という概念もなくなり、学生達は青春時代を存分に謳歌した。

「ただいま」

美希とラファエルは手をつないで学校から帰ってきた。正式な養子縁組をして、ラファエルも大沢家の娘になっていた。どちらが姉かという論争に決着がつくことはなかったが、有名な美人姉妹ということだけは間違いなかった。

「あれ、二人とも今日は畑に行くんじゃないの？」

リビングでくつろいでいる両親を見て、美希は首を傾げた。

「実はね、二人に妹ができたのよ」

姉妹はサツちゃんの手を取ってキャーキャー騒ぐ。

「……でも、その子はひょっとしてエンリルさんだったりしませんか？」

ラファエルの質問に、光希がうなずく。

「それは十分考えられる。でもまあ、女の子だしさ、サツちゃんに似て美人で可愛くて優しい子に育つと思うよ」

生まれる前からの親バカっぷり。サツちゃんがクスッと笑う。

「どんな子であれ、愛情をかけて育てれば、きっといい子になるわ」

「ラマシュトウとエヴァ、二人のグレートマザーがいる家なんだから、誰が生まれてきたって平気よ」

美希はサツちゃんの下腹部に手を当て、その手が白く光る。

「あ、チートです。ずるして祝福したらガブちゃんに叱られます」

「可愛い妹のためなら、ちよっとぐらい怒られてもいいもん」

美希はべーっと舌を出す。

「そうだ、ガブリエルさんから手紙がきてたわよ」

手渡されたのは美希とラファエルに宛てた手紙だった。ガブリエルとメタトロンは金星の開拓に従事していた。金星開拓は将来の人口増加に備えての政策である。

「えー！ ガブちゃんもおめでただって！」

またしてもキャーキャー大騒ぎの姉妹。サツちゃんは目を真ん丸にして驚いている。

「父様の子どもっていうことは……わたしの異母兄弟？」

「え？ 異母兄弟って……サッチちゃんは知らないんですか？」

ラファエルは美希の顔を見る。美希は慌てて目をそらした。

「大事なこと、言い忘れてますね？ ミカ」

「ごめん……忘れてたかも……」

ガブリエルやメタトロンに話を通じやすくするため、天界の神性を一時的に持たせたときのことだった。ガブリエルは長い間心の奥底に封印していた記憶を取り戻したのだ。それは、最愛の娘が迎えるくるのを待ちながら、寸前のところで原爆で亡くなったときのつらい記憶だった。

「ガブちゃんはサツキさんです。サッチちゃんの本当のママですよ」

サッチちゃんは「そんなわけないわ」と、笑いだす。

「母様はおしとやかな日本人女性だったのよ。ガブリエルさんみたいな金髪グラマーのキャリアウーマンとは正反対のタイプじゃないの」

美希はヒソヒソ話でもするように口の横に手を添えて言う。

「メッティはね、実はブロンドでおっぱいの大きい女の子が好きな。ああ見えて結構ムツリさんみたいよ」

サッチちゃんは遠い目で過去を振り返る。

「やだ、ほんとだ。後妻のメイドさんがまさに金髪でグラマーさんだったわ。じゃあ、母様は父様の好みそうな身体を持って、でも、つらい記憶は封印したままで父様のそばにずっといたのね」

「メッティだけはそのことにずっと前から気付いていました。でも、ガブちゃんが思い出さくれないなら思い出さなくていいと、ずっと我慢してました。……男です。大人しそうに見えて、凄い人です」

サッチちゃんはプーッとほっぺを膨らます。

「でも、わたしにぐらい言ってくれてもよかったと思わない？ ずっと母様はどこに行ったんだらうって心配してたんだから」

それでもサッチちゃんは幸せそうに目を閉じ、「ま、いっか」とつぶやいた。

安定期に入ったらみんなで金星旅行に行こうと、光希は提案した。

「じゃあ、本屋さんで金星のガイドブック見てくる！」

「あ、パパアイス食べたい。ついでに買ってきて〜」

「了解です！　いつてきまーす！」

澄み渡った青空の下、元気に駆けだして行く姉妹。怖いぐらいに何もかもが上手くいく日常。幸せな日々。それでも彼女達は恐れない。最高の家族に最高に愛されていると知っているから。愛を知る子ども達はいつだって無敵なのだ。

――了――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3508w/>

続・サキュバスサっちゃん

2011年9月10日03時15分発行